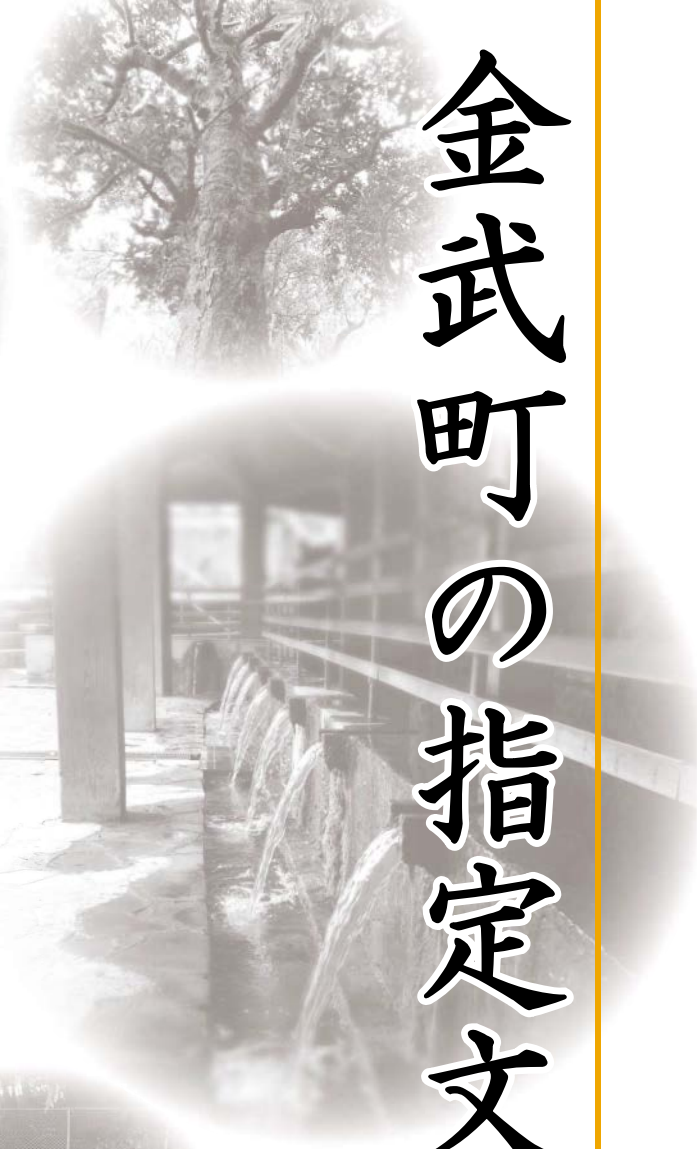


金武町の指定文化財



2022 (令和4) 年
金武町教育委員会



金武町の指定文化財

2022 (令和4) 年
金武町教育委員会

はじめに

本書は、1994年（平成6）に発行した『金武町乃指定文化財』の改訂版です。

金武町指定文化財は、1984年（昭和59）に「金武観音寺」が第1号に指定されてから1994年（平成6）までに計15件の文化財が指定されました。

そのうち1991年（平成3）に指定された「拝神場のアコウ」は1996年（平成8）に沖縄本島を通過した台風による自然災害で朽ち倒れたことで、2000年（平成12）に町指定文化財から解除されることになりました。

拝神場のアコウが町指定文化財を解除されてから21年後の2021年（令和3）に「旧金武村の忠魂碑」と「旧億首橋」が新たに加わり、町指定文化財は計16件となりました。これら町指定文化財の他にも、1985年（昭和60）に沖縄県指定有形文化財に指定された「梵鐘（旧天界禅寺鐘）」や2021年（令和3）に国登録有形文化財となった「當山記念館」など、貴重な文化財が町内に所在しています。

本書では、指定文化財の写真と共に解説にはわかりやすい言葉を選ぶことで幅広い方々に親しまれるよう配慮いたしました。町民の方々や教育の場において身近な資料として利用され、また文化財保護の重要性について理解深める一助としてご利用いただけることを願います。

末尾になりましたが、発刊にあたり文化財所有者の方々、町文化財保護審議委員の方々、関係各位のみなさまに多大なるご指導ご協力を賜りましたこと篤くお礼申し上げます。

2022年（令和4）3月
金武町教育委員会
教育長 比嘉貴一

例 言

1. 本書は、金武町の歴史と文化第10集『金武町の指定文化財』とした。
2. 平成6年に発刊した「金武町乃指定文化財」をもとに内容の一部に手を加え改めなおし、新たに加わった文化財を追記して収録（改訂版）した。
3. 指定文化財は、写真と文化財について解説をおこない、町指定、県指定、国登録の順で所在する区別にまとめた。
4. 指定文化財の写真は、現在の様子をつたえるため令和3年度に撮影した写真を主に掲載している。
5. 本書の編集体制は以下のとおりとした。
編集責任者 社会教育課長 仲間功
編集責任者 社会教育課長補佐 伊波朝親
編集責任者 社会教育係長 山城平
編集員 町史・文化財係主任 宜野座秀
編集員 町史・文化財係会計年度職員
安富祖宴／岸本卓己／玉城菜美路／仲間晴香
仲本祥太／屋比久美香子
6. 本書は、宜野座秀・岸本卓己・玉城菜美路・仲間晴香・屋比久美香子の共著によるもので、地図作成および図版編集は、安富祖宴・岸本卓己、仲本祥太が担当した。
7. 主な執筆要領は、以下のとおりとした。
 - ふりがなは一般的な呼称を用いた。
 - 解説の方言は、一般的に周知された発音と金武の各字で使われている発音をカタカナで表記した。
 - 解説に出てくる年号は西暦を基本とし、()内には近世琉球までを中国年号、近代からは日本年号を表記した。

謝 辞

1. 本書の編集や各文化財所在地における写真撮影に際して、町内各事務所および各文化財所有者の方々にご協力、ご教示をいただきました。深く感謝申し上げます。
【金武区】
金武区長 宜野座武／事務所職員
【並里区】
並里区長 山城宏一／事務所職員
【中川区】
中川区長 花城清隆／事務所職員
【伊芸区】
伊芸区長 安富祖稔／事務所職員
【屋嘉区】
屋嘉区長 島本勇人／事務所職員
【金武区入会権者会】
吉田秀樹／仲間和章
【南又島芸能保存会】
上江洲誠
【金武観音寺】
住職 元山善弘／元山満寿美
2. 本書の執筆および掲載資料を確認するにあたり、金武町文化財保護審議委員会の方々をはじめ、町文化財行政にご協力いただいた皆様には多くの助言や情報提供、資料提供など、特段のご配慮をいただきました。深く感謝申し上げます。
【金武町文化財保護審議会】
天久忍／神谷幸彦／川満彰／崎原垣新／田里一寿
仲間郁代／仲村弘喜／前田直美
【元金武町文化財保護審議会（平成17～24年）】
伊芸光吉
【東京大学総合研究博物館】
東アジア・ミクロネシア古写真資料画像データベース
【Photographer】
山口直樹
【前田びんがた工房】
前田直美

はじめに	i
例言・謝辞	ii

金武・並里

金武観音寺	3
観音寺のフクギ	6
勾玉・簪・古文書（金武ノロ神具）	7
トゥムスズ御嶽	9
ウッカガー（金武大川）	10
慶武田川（キンタガー）	11
茶 川（サーガ）	12
旧億首橋	13
旧金武村の忠魂碑	15
拝神場のアコウ	16
梵 鐘（旧天界禅寺鐘）	17
當山記念館	18

中 川

ナコオガーのイズミ（名古川の泉）	22
------------------	----

伊 芸

伊芸のがじまる	25
南又島（フェーヌシマ）	26

屋 嘉

ヨリブサノ御嶽（東御嶽）	28
底森御嶽（西御嶽）	29
屋嘉のウフカー（大井戸）	30
屋嘉の芸能衣裳	31

金武町の指定文化財

指定文化財一覧（町・国・県）	41
----------------	----

附 編

1. 金武町の歴史	42
2. 再現された屋嘉の芸能衣裳	47

目 次

金武・並里（方言：シンブラ・ナンダトゥ）

町指定・県指定・国登録文化財マップ



① 町指定文化財 金武観音寺 P3



金武観音寺は、1934年(昭和9)に失火によって消失してしまい、1942年(昭和17)に現在の形へと再建されました。1945年(昭和20)におこった沖縄戦でも戦火を受けなかった数少ない木造建築物です。

① 町指定文化財 観音寺のフクギ P6



金武観音寺の境内には、推定樹齢約350年以上といわれるフクギの木があります。県内で知られているフクギのなかでも比較的大きく成長し、2004年(平成16)には「おきなわの名木百選」に選ばれました。

① 県指定文化財 梵鐘(旧天界禅寺鐘) P17



金武観音寺には、1466年(成化2)に鑄造された梵鐘があります。元々は首里の天界禅寺に掛けられていたと言われています。沖縄戦時には行方不明となりましたが、戦後金武の山中で発見されました。

② 町指定文化財 勾玉・簪・古文書(金武ノロの神具) P7



金武ノロに代々引き継がれてきた「勾玉・簪」の神具と「古文書」があります。金武ノロの神具は、集落祭祀や祈願行事などで使用していました。古文書は5冊あり、いずれも修復がなされています。

③ 町指定文化財 トゥムスズ御嶽 P9



トゥムスズ御嶽は、標高約70mの琉球石灰岩の丘陵に位置し「琉球国由来記」に記されている由緒ある御嶽です。御嶽がある場所からは、グスク時代～近世における集落形成期の遺物が採取されています。

④ 町指定文化財 ウッカガー(金武大川) P10



ウッカガーは、琉球石灰岩の割れ目から湧き出る湧泉で、県内でも豊富な水量を有しています。地元ではウッカー(ウフカー=大川)といい、「ウフ」は大きい「カー」は泉や井戸などの意味があります。

⑤ 町指定文化財 慶武田川(キンタガー) P11



キンタガーは、琉球石灰岩の割れ目から湧き出る湧水で並里集落の発祥と関わりがあるといわれています。夏場でも湧れることなく豊富な水量を保ち、地域住民の生活用水としても活用されていました。



⑥ 町指定文化財 茶川(サーガ) P12



サーガは、多孔質な琉球石灰岩を通り湧き出る湧水で、水の透明度は高いといわれています。地域住民の生活用水や水田を潤したほか、近年まではウナギの養殖にも湧水が利用されていました。

⑦ 町指定文化財 旧億首橋 P13



旧億首橋は、1931年(昭和6)に建設されたアーチ橋ですが1945年(昭和20)の沖縄戦で旧日本軍に爆破されたといわれています。橋の付近には琉球王府時代の「宿道」も整備され、交通の要所でもありました。

町指定文化財 県指定文化財 国登録文化財 指定文化財解除

金武観音寺

文化財指定年月日／1984年（昭和59）6月1日 町指定有形文化財（建造物）

金武町指定文化財



- 📍 金武町字金武222番地
- 🚌 金武バス停より歩いて5分ほど
- 🚗 金武ICより車で8分ほど
- 🅑 金武観音寺専用駐車場
- 🗺️ 金武・並里 B-3 [2ページ]



金武観音寺の正面入口

金武観音寺は、1521～1522年（正徳16～嘉靖1）の尚真王の時代に、今の和歌山県から出向して金武の富蔵（現在の福花）の海岸にたどりついた真言宗の高僧日秀上人によって創建されたと伝えられています。

組踊で知られる『久志の若按司』では、道行口説の歌詞に「久志の山路 分け出でて 行けば程なく 金武の寺 お宮立ち寄り 伏し拝み 南無や観音 大菩薩 慈悲の功德や 千代松に 急ぎ引合はせ 賜れてり…」と観音寺が謡われています。

また、1853年（咸豊3）にはアメリカのペリー艦隊の乗組員が観音寺に立ち寄ったという記録があるなど、古くから名の知れた社寺であったことが窺えます。

1934年（昭和9）に観音寺は失火によって焼失しましたが、当時の村長池原新蔵氏をはじめ村の人々たちが力を寄せて1942年（昭和17）に再建されました。

1945年（昭和20）の沖縄戦で多くの社寺が消失したなか戦火を免れた観音寺は、県下でも数少ない戦前の建築様式をとどめた木造建築物です。

真言宗は、約1200年前に弘法大師空海（こうぼうたいしこうかい）によって開かれました。「真言」とは大日如来の真実の言葉を意味します。



金武観音寺本堂内



金武観音寺の建築手法

1942年(昭和17)に再建された金武観音寺の建築様式には、近世社寺の建築手法が取り入れられています。

本堂は桁行約9.0m、梁間約7.2mあり、平入りの正面入口は高さ約2.0m、梁間約3.6mの流れ造りとなっています。

屋根は入母屋造で赤瓦を葺き、野地には山原竹が使われています。

建物の三方には幅約0.9mの回廊を渡して四隅には「擬宝珠柱」を立てて、勾欄(手摺)が巡らされています。

向拝柱は柱頭の上で「斗棋四方肘木組」となって、柱には錫杖彫を施した「海老虹梁」が架けられています。

頭貫の「向拝虹梁」両端には「拳鼻」の装飾に渦や若葉などの彫を施し、虹梁上にはみごとな「臺股」が飾られています。

金武観音寺再建の設計者は、当時沖縄県庁の建築技師新里清昌氏(しんざとせいしょう)が携わったという記録があります。清昌氏は自村のお寺の設計ということで心血を注ぎ、棟瓦造りの時には京都出張して瓦工と共に徹夜で何回も造り直したといわれています。

観音寺の仏像

金武町指定文化財



阿弥陀如来

聖観音菩薩

薬師如来



大目如来

金武観音寺には「しょうかんのんぼさつ 聖観音菩薩」「あみだにょらい 阿弥陀如来」「やくしにょらい 薬師如来」の三尊と「だいにちにょらい 大目如来」が祀られています。1942年(昭和17)の再建時に奉安された仏像であり、沖縄戦では本島内で唯一戦火を免れた仏像です。

また、戦後の混乱期に作られたというジュラルミン製の観音像も奉納されていますが、制作年代や製作者はわかりません。



ジュラルミン製の観音像

戦後、金武観音寺は解体されアメリカ本国へと移築の計画がありましたが、金武に赴任した米軍人が学者であったことから観音寺は文化財として保護されました。

写真(上)・写真(左下)は、写真家の山口直樹氏(やまぐちなおき)が撮影した画像を掲載しています。

観音寺のフクギ

文化財指定年月日／1991年（平成3）12月24日 町指定天然記念物



金武観音寺の正門から参道を進むと、どっしりとした大きな「フクギの木」があります。胸高周り約3m、樹高約12m、推定樹齢は約350年以上とも伝えられています。

フクギは、和名で『福木』と書き沖縄では「フクジィ」や「プクギィ」などといいますが、金武では「サバギ」ともいいます。

フィリピンを原産とするフクギ科の常緑高木で、厚みがある楕円形の葉は長さ6～15cmほどあり、葉の表面は光沢があります。5～6月にかけてクリーム色の花を咲かせ、8～10月には直径2cmほどの黄色く熟した実がなります。

沖縄では、琉球王国時代から紅型などの着物につかう鮮やかな黄色の染料をフクギの樹皮から抽出していました。樹皮が染料の材料として育つには40年以上かかるともいわれています。

1934年（昭和9）に起きた金武観音寺の焼失や1945年（昭和20）の沖縄戦など、度重なる災難を乗り越えてきたフクギでもあります。



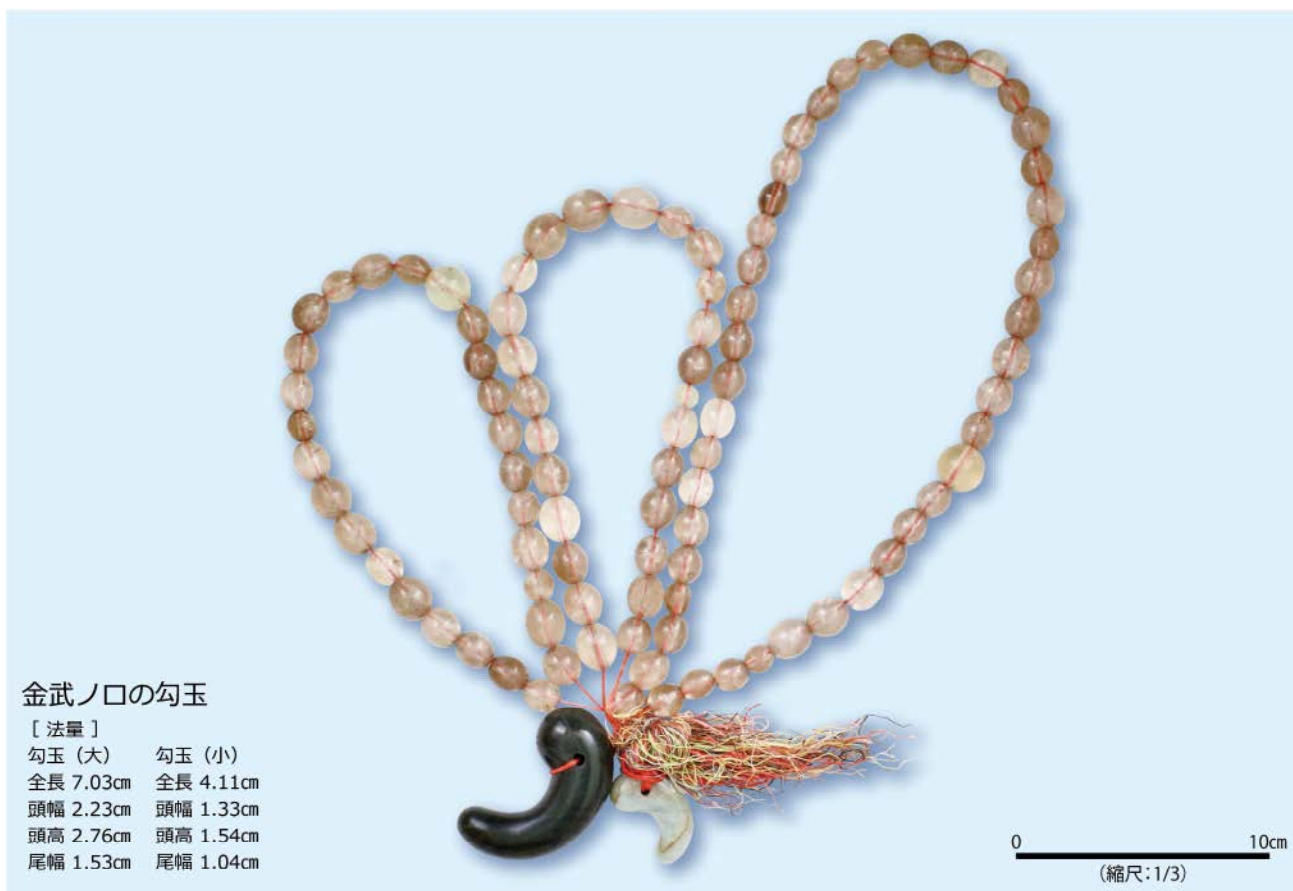
- 📍 金武町字金武222番地
- 🚌 金武バス停より歩いて5分ほど
- 🚗 金武ICより車で8分ほど
- 🅑 金武観音寺専用駐車場
- 🗺️ 金武・並里 B-3 [2ページ]



勾玉・簪・古文書（金武ノ口の神具）

文化財指定年月日／1992年（平成4）5月7日 町指定民俗文化財（有形）

金武町指定文化財



金武ノ口の勾玉

〔法量〕

勾玉（大）	勾玉（小）
全長 7.03cm	全長 4.11cm
頭幅 2.23cm	頭幅 1.33cm
頭高 2.76cm	頭高 1.54cm
尾幅 1.53cm	尾幅 1.04cm



ノ口殿内（金武区）



扇を持つノ口

「ノ口」とは、村の御嶽^{ウタキ}などにおいて集落祭祀^{さいし}や祈願行事^{きがん}をおこなう神女^{しんじょ}のことをいいます。

第二尚氏王統3代の尚真王（1477～1526年）の時代に制度化された神女組織で最高神女には「聞得大君」を頂点に「三平等」「三十三君」「大阿母」「ノ口」の階級で厳格に統制されていました。琉球王府から辞令を受けたノ口たちには「勾玉・水晶玉・神衣裳・簪・大扇」などの神具とノクモイ地とよばれる「役地」が与えられました。

金武ノ口は三平等の一つ「首里大阿母志礼」の管轄に置かれ、祭祀のほかには王府からの命令や伝達を村人に伝える役目もありました。ノクモイ地は、底盛原、甘喜原、伊名嘉原、池久保原、喜瀬武原のほかにも数多くあったといます。また、祭祀や祈願などで使用する神具も与えられ、そのうち「勾玉・簪」の神具と古文書が金武ノ口に代々引き継がれて大切に保管されてきました。

「勾玉」は大小2個に水晶玉93個とガラス玉3個が三連の環状につながり、「簪」はガラス製と鼈甲製の2点があります。ガラス製の簪は珍しい神具の一つです。

東京大学総合研究博物館所蔵「扇を持つノ口」の写真は、明治期に徳島県出身の鳥居龍蔵氏（とりいりゅうそう）が沖縄調査旅行で撮影しました。写真のノ口がどこの地域のノ口なのかは不明です。

金武ノ口の簪

〔法量〕

ガラス製 韃甲製
 全長 13.4cm 全長 4.70cm
 頭部 1.56cm 頭部 2.02cm
 竿 12.2cm 竿 2.67cm (欠損部)



0 5cm
 (縮尺:1/1)



金武ノ口の古文書

(左) 金武村のろくもい地名奇帳 1682年 (中後) のろこもい代合の時 1781年 (右後) 金武のろくもい御臺所修繕入費割府入帳 1897年
 (中前) 伊藝力マ死亡の時 1916年 (右前) 金武のろくもい地懸叶銘々取メ帳 1881年

ウッカガー（金武大川）

文化財指定年月日／1992年（平成4）5月7日 町指定記念物（史跡）



- 📍 金武町字金武640番地
- 🚏 金武町役場前バス停より歩いて5分ほど
- 🚗 金武ICより車で10分ほど
- 🅑 大川児童公園専用駐車場
- 🗺️ 金武・並里 B-3 [2ページ]



ウッカガー風景

ウッカガー（金武大川）は、並里集落の中央にある共同湧水です。県下でも有数の水どころとして知られ、1日に湧き出る水量は1,000トンを超えますが、1978年（昭和53）には1日に3,600トンの湧水量がありました。

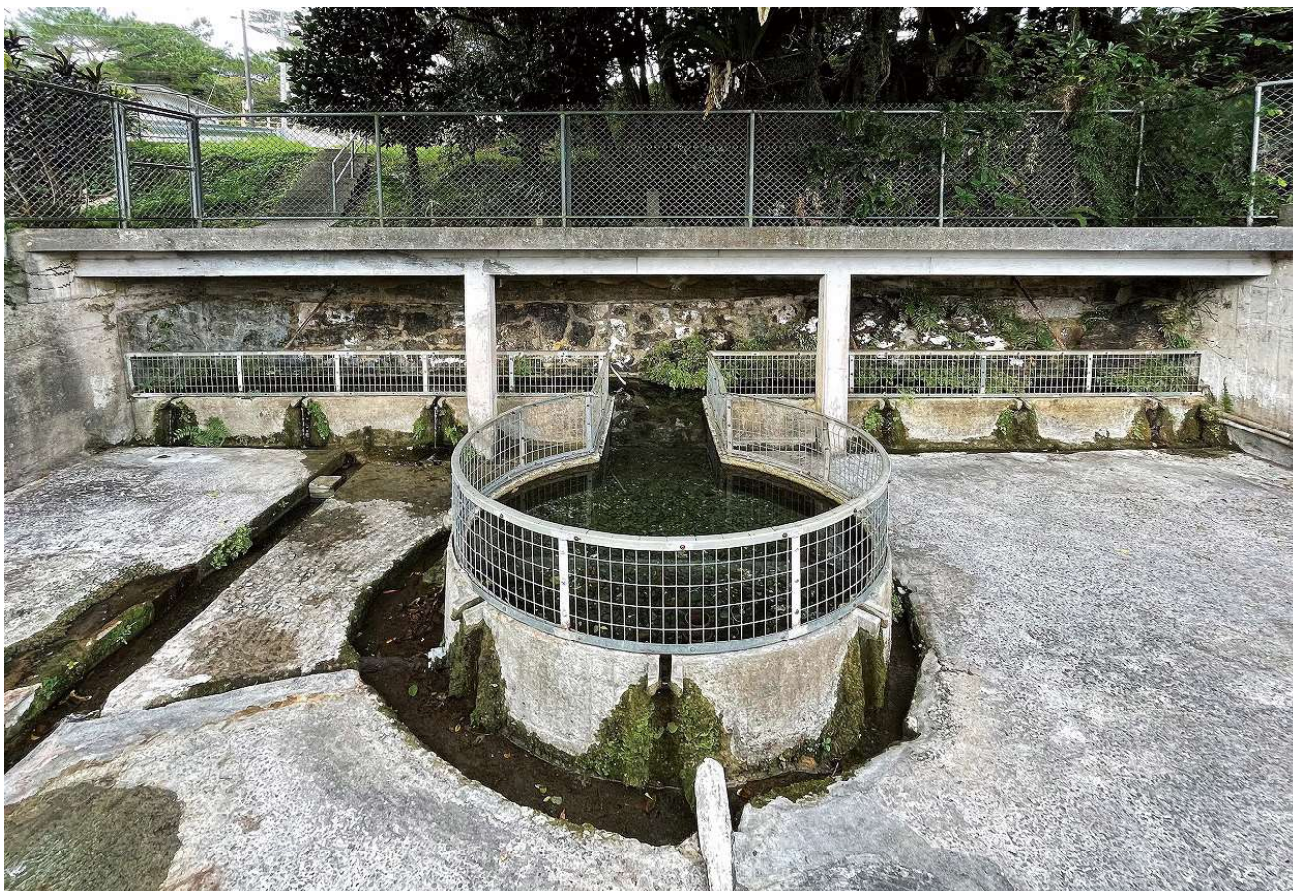
大正初期頃のウッカガーは、三つのガマグチ（琉球石灰岩の割目）から水が湧き溢れ、どこまでが水汲場なのかはっきりとしていませんでした。1924年（大正13）に昭和天皇の御成婚記念事業として、金武・並里の両区が費用1,600円（現在の価値で約167万円）を負担し、金武では最初のコンクリート構造物として整備されました。この記念事業では男女別の水浴場、イモ・野菜洗場、牛馬洗場など用途別に区切りました。1930～1931年頃（昭和5～6）の拡張工事では新しく洗濯場、髪洗場、噴水が設けられました。

「長命の泉」ともいわれるウッカガーは、生活用水のみならず、元旦にはじめて汲む「若水」、生まれた赤子の「産水」、子供の額につける「水撫」、お産に使用した汚れ物を洗い流す「カーウリー」など、お祝いの儀礼にも利用されていました。

1964年（昭和39）にウッカガーと鍾乳洞が新沖縄観光名所に選ばれました。現在のウッカガーは、1990年（平成2）に改修工事がおこなわれたほか大川児童公園なども整備されました。

慶武田川（キンタガー）

文化財指定年月日／1991年（平成3）12月24日 町指定記念物（史跡）



- 📍 金武町字金武919番地
- 🚌 町役場前バス停より歩いて15分ほど
- 🚗 金武ICより車で12分ほど
- 🅑 専用駐車場なし
- 🗺️ 金武・並里 C-4 [2ページ]



慶武田川(キンタガー)は、並里区の集落から南東の小高い丘の斜面にある大きな湧水ゆうすいです。夏場でも湧水かつすいすることがない豊富な水量を有しています。並里区の村踊りで披露される『長者の大主』のアマエーダー節には「天人 慶武田原にきて 泉口をみつけ 田んぼをつくる…」とあり、慶武田川の湧き水を表したのではないかともいわれています。

昭和初期頃の慶武田川は琉球石灰岩の割れ目から流れ出るままで、飲料水用の水汲場を大きな松材で塞ぐように造り、あふれ出る水は田畑の用水に使われていました。1935年頃(昭和10)には湧き水を有効に利用するため、現在のコンクリート造りの「ヒージャー(樋川)」に整備されました。

古くから地域住民は生活用水として飲料水を汲んだほか、洗濯や芋洗い、田畑にまく種もみひたを浸した場所としても利用していました。また、男女別の水浴場があり、子どもたちにとっては水に親しみ泳ぎを覚える場所でもありました。

1963年頃(昭和38)になると各家庭への上水道が普及したことで、慶武田川の利用も少なくなりました。

茶川（サーガ）

文化財指定年月日／1991年（平成3）12月24日 町指定記念物（史跡）

金武町指定文化財



- 📍 金武町字金武12041-2番地
- 🚗 喜瀬武原入口バス停より歩いて18分ほど
- 🚗 金武ICより車で12分ほど
- 🚗 専用駐車場なし
- 🗺️ 金武・並里 B-4 [2ページ]



茶川風景

茶川(サーガ)は、福花原の広い田畑を見渡す場所にあるコンクリート造りの囲い込み湧水(ヒージャー)です。多孔質な琉球石灰岩をとおり湧き出る水は、金武にある湧泉のなかでも透明度は高いともいわれています。

茶川という名称は、金武観音寺を創建した日秀上人が、ここから湧く水を飲み「お茶のようにおいしい水である」ということからサーガと呼ぶようになったという由来があります。

また、1721年(康熙60)に発刊された『中山伝信録』には「神人來りたまいて 富蔵なる水きよきかな…」とあり、茶川の清流を書き表した古謡ともいわれています。

古くはソジュイダカリ(仁牛組)やダトウバル(美里原)の地域住民の飲料水として茶川を利用していたほか、豊富に湧く水は「田越灌漑」という水管理により、田んぼから田んぼへと水を送ることで福花原の水田を潤してきました。

1963年(昭和38)以降、村々への水道事業の整備がおこなわれると、生活用水や農業用水として茶川の湧き水が利用されることはなくなりました。

ソジュイダカリ(仁牛組)とは、戦時下に国民統制のためにつくられた地域組織(隣組)の名称です。茶川から南西側の地域で、現在の並里4区8～9班の範囲を指します。ダトウバル(美里原)は、茶川の西側に位置した地域で字金武64小字名(原名:ハルナー)の一つです。

旧億首橋

文化財指定年月日／2021年（令和3）1月1日 町指定記念物（史跡）

金武町指定文化財



- 📍 金武町字金武10406番地付近
- 🚌 銀原バス停より歩いて8分ほど
- 🚗 金武ICより車で12分ほど
- 🅑 ヤマクモー広場専用駐車場
- 🗺️ 金武・並里 A-4 [2ページ]



金武ダム堤体から見る旧億首橋

旧億首橋は、1931年（昭和6）に建設されたコンクリート造りの『充腹式上路アーチ橋』として、億首川の中程に架けられていました。

この旧億首橋は、琉球石灰岩を材料にセメントで固めたアーチ石（輪石）と、アーチ上の両端にはコンクリートでできた側壁、さらに橋の欄干（手摺）から構成されていました。

また、コンクリート側壁の表面には、手で握ったモルタルを投げつけて丸みのある凹凸をもたせて重厚感のあるデザインに仕上げられています。

橋として供用された期間は短く1945年（昭和20）の沖縄戦では、北上してくる米軍の進行を妨げる目的で旧日本軍により爆破されたといわれています。現在では爆破された橋の一部が形を残し当時の状態で保存されています。

沖縄戦で爆破された旧億首橋の残存部を計測し、戦前に撮影された古写真から得られる情報をあわせると、旧億首橋本体は幅員約5.0m、長さ約22m、高さ約6.5mの大きさがあったと推定されています。

旧億首橋のアーチ橋構造

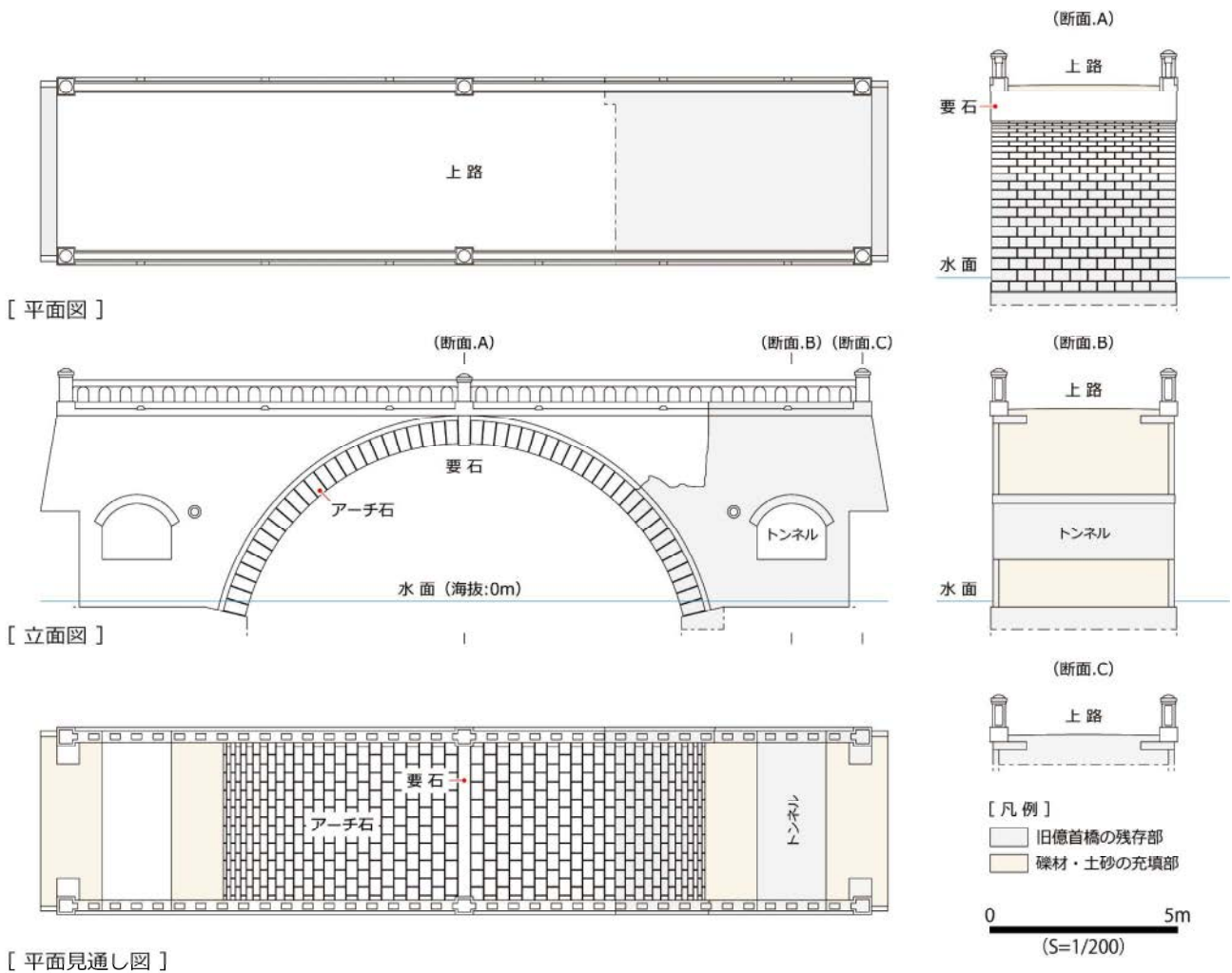


旧億首橋側壁のモルタルの様子

『充腹式上路アーチ橋』とは、水平な通路部分を下からアーチリブで支える構造をいいます。旧億首橋もアーチリブを設けて両端には側壁を付け、なかには礫材や土砂を充填し通路部分が造られています。

旧億首橋がある付近一帯は歴史的に古くから交通の要所で、周辺には琉球王府時代から明治時代の「国頭方東海道(宿道)」があり、大正時代には「村道」が整備されました。

また、戦後アメリカ統治時代は軍営繕道路(琉球政府道13号)、復帰後には国道329号など、各時代における主要な道路が整備されました。



旧億首橋想定復元図

旧億首橋に関する資料は少なく、設計した人物についてもわかっていません。

旧金武村の忠魂碑

文化財指定年月日／2021年（令和3）1月1日 町指定記念物（史跡）

金武町指定文化財



- 📍 金武町字金武4番地
- 🚌 金武町役場前バス停より歩いて5分ほど
- 🚗 金武ICより車で10分ほど
- 🅑 金武町役場専用駐車場
- 🗺️ 金武・並里 B-3 [2ページ]



忠魂碑がある雄飛の森風景

旧金武村の忠魂碑は、日露戦争をはじめ満州事変や支那事変に金武村から出征して亡くなった兵士の「忠義の魂」を顕彰するため、1936年（昭和11）に建立されました。

当時としてはめずらしく石碑を支える台座は丈夫なコンクリート造りになっています。石碑には「忠魂碑」の三文字と碑文を揮毫した「陸軍大將鈴木莊六」の名前が刻まれ、台座には陸軍を象徴した「星」と海軍を象徴した「錨」の形を組み合わせたレリーフが取り付けられています。

忠魂碑が建てられた背景には、戦争を大義として、お国のため天皇陛下のためにと国民の戦意高揚をうながす目的がありました。そのため1945年（昭和20）の終戦までの間、在郷軍人会などによる招魂祭がおこなわれ、軍国主義のもと人々を戦争へとまきこむ存在でもありました。

戦前まで忠魂碑から記念道路までつづく通路がありましたが、終戦後に大部分が取り壊されてしまいました。現在、忠魂碑は雄飛の森のなかでひっそりと戦時体制下の金武村の様子を今に伝える戦跡となっています。

忠魂碑の石碑は、硬い泥質砂岩を使用し高さは2mあります。石碑を支える台座は高さ約2.4mあり、石碑と台座を合わせると総高は約4.4mあります。記念道路とは、大正天皇の即位を記念して1915年（大正4）に作られた道路で、幅は約5m、長さは約200mもありました。

拝神場のアコウ

文化財指定年月日／1991年（平成3）12月25日 町指定天然記念物
文化財指定解除年月日／2000年（平成12）5月24日

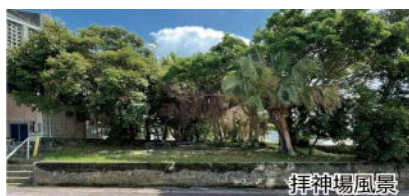


1990年代に撮影されたアコウ

金武町指定文化財解除



- 📍 金武町字金武4番地
- 🚌 金武農協前バス停より歩いて3分ほど
- 🚗 金武ICより車で9分ほど
- 🅇 金武区公民館専用駐車場
- MAP 金武・並里 C-3 [2ページ]



拝神場風景

金武地区公民館の敷地内には、^{ヘーシンバ} 拝神場のアコウと呼ばれていた巨樹がありました。

アコウは、^{きょうこうちよっけい} 胸高直径約 1.51m、^{じゅこう} 樹高約 13m、^{すいていじゆれい} 推定樹齢約 80 年と伝えられていました。アコウの樹冠は傘状に見事な広がりを持ち、拝神場に^{しげ} 繁る巨樹として、1991 年（平成 3）12 月 25 日に金武町天然記念物に指定されましたが、1996 年（平成 8）9 月 29 日の台風 21 号により幹の中間部分から倒れてしまいました。

その後、アコウは全体的に^く 朽ちて再生の^{きざ} 兆しがみられなかったため、2000 年（平成 12）5 月 24 日に金武町天然記念物の指定を解除されました。

アコウがあった拝神場とは、1897 年（明治 30）に開校した金武小学校を建設するとき、学校予定地の^{ウタキ} 御嶽原に^{さんざい} 散在していた^{こうろ} 香炉を一つの場所に集めた御嶽をいいます。

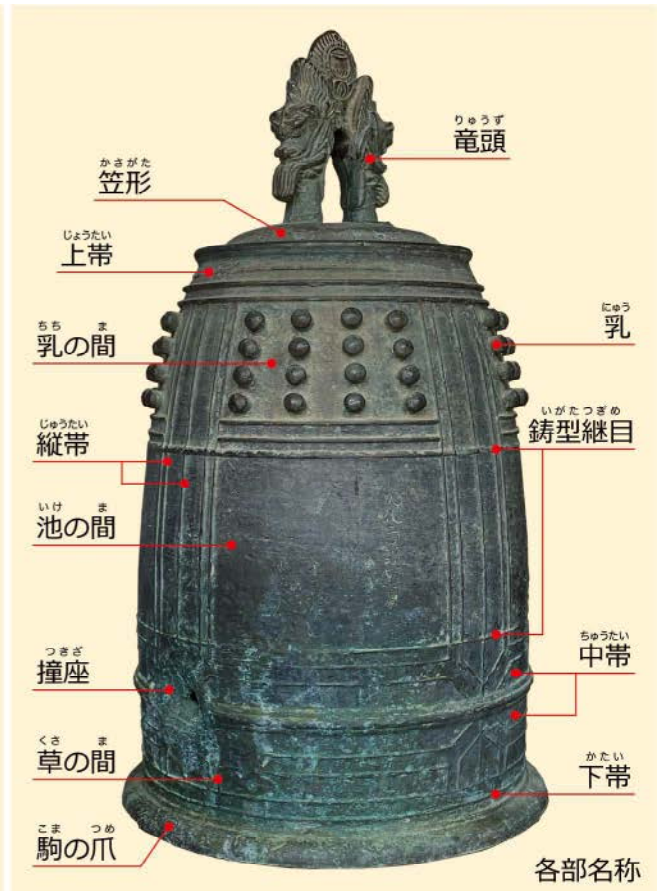
また、香炉のなかには屋号ウガミンニの先祖が唐旅（現在の中国への旅）から持ち帰ってきた石を香炉にしたという伝承もあります。

金武小学校がある場所は当時「ウガミ」といって樹々がうっそうと茂り、そこから木の枝一本でも取ると神の祟りがあると恐れられていました。この土地に学校建設を決意したのが沖縄海外移民の父『當山久三』でした。

梵鐘（旧天界禅寺鐘）

文化財指定年月日／1985年（昭和60）6月18日 県指定有形文化財（工艺品）

沖縄県指定文化財



各部名称



- 金武町字金武222番地
- 金武バス停より歩いて5分ほど
- 金武ICより車で8分ほど
- 金武観音寺専用駐車場
- 金武・並里 B-3 [2ページ]



金武観音寺風景

金武観音寺に保管されている梵鐘は、第一尚氏王統7代の尚徳王（1461～1469年）が即位して6年目の1466年（成化2）に鑄造し首里の天界寺に掛けたと記録があります。

その後、梵鐘は1713年（康熙52）の時点で那覇にある波上宮の護国寺拜殿に安置されて、1929年（昭和4）以降は金武観音寺に収められました。

1945年（昭和20）の沖縄戦では金武観音寺から梵鐘が紛失して行方不明となりましたが、戦後に金武の山中で発見されました。どのような経緯があって梵鐘が山中に移されていたのか詳しいことはわかっていません。

はじめに梵鐘が掛けられた天界寺は、琉球史上もっとも仏教を信仰した第一尚氏王統6代の尚泰久王（1454～1460年）が在位して創建しましたが途中で亡くなり、そのあと尚徳王が在位を継いで大宝殿も建立しました。

琉球王国では「天界寺」のほか「円覚寺」「天王寺」が三大寺院に数えられた菩提寺でしたが、1945年（昭和20）の沖縄戦ではすべてが焼失してしまいました。

旧天界禅寺鐘は、総高91.0cm・口径49.3cmの大きさがありますが、撞座の箇所は欠けているため鐘を鳴らすことはできません。菩提寺とは、先祖代々のお墓や位牌を納めて法要を営むお寺のことをいいます。首里にあった天界寺は第一尚氏の菩提寺でした。

當山紀念館

文化財登録年月日／2021年（令和3）2月26日 国登録有形文化財（建造物）



国登録有形文化財



- 📍 金武町字金武4番地
- 🚌 金武町役場前バス停より歩いて5分ほど
- 🚗 金武ICより車で10分ほど
- 🅑 金武町役場専用駐車場
- 🗺️ 金武・並里 B-3 [2ページ]



當山久三像

とうやまきねんかん とうやまきゆうざう
當山紀念館は、沖縄海外移民の父「當山久三」の偉業を
けんしょう
顕彰するため、1935年（昭和10）に建設されました。建設には當山久三像建立の余剰金（よじょうきん）（寄付金）が使われました。

鉄筋コンクリート造平屋の建物は、金武出身の建築家
おおしろりゆうたろう
「大城龍太郎」が設計を手掛けました。この當山紀念館は、
アーチ型の玄関ポーチ、八角形の採光窓（さいこうまど）、曲線を描く天井の廻り縁といった近代的な建築のデザインが採用されています。また、平天井を支える梁（はり）を屋外に設ける「逆梁工法」（ぎやくはりこうぽう）で建築されているため、室内の天井は高く、広々とした空間がとられています。

建築後は移民教育や村会に利用され、終戦後には金武村役所の臨時庁舎、私立愛泉幼稚園に利用されていました。

1958～1974年（昭和33～49）にかけて建物の増築がおこなわれ、玄関や窓は現代的なアルミ材（たてく）の建具に代わりました。その後、2016年（平成28）に改修工事（かいしゅうこうじ）をおこない、劣化した増築部分を取り壊し、すべての建具は木製に取り換えられて建築当時の状態に復旧されました。

大城龍太郎

大城龍太郎おおしろりゅうたろうは1897年（明治30）生まれ（屋号マチヤサンジョ）金武町字金武出身で昭和期の沖縄を代表する建築家です。

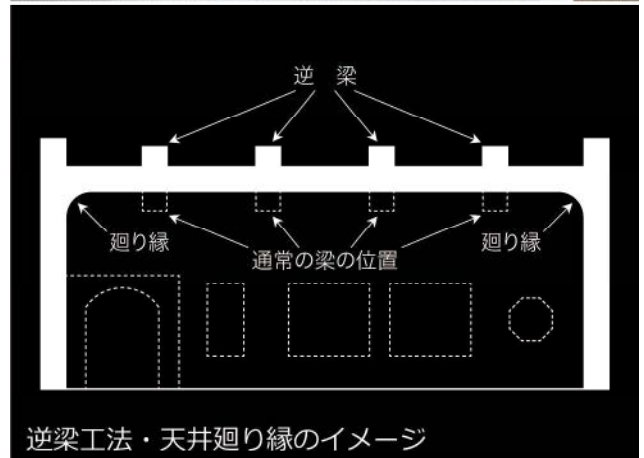
1929年（昭和4）に沖縄県庁へ入庁し、土木課技手として戦前は、當山記念館、興亜会館こうあ（金武公会堂）、武徳殿ぶとくでん（警察武道場）など、多くの公共施設の建築や設計をおこないました。

戦後は独立して設計事務所を設立し、移民会館（那覇市若狭）、波之上宮、琉球政府立法院議事堂、旧金武村役所など、昭和の沖縄を象徴する数々の設計も手掛け、1968年（昭和43）には沖縄建築専門学校を創立するなど沖縄建築界に貢献しました。

1975年（昭和50）に勲五等叙勲を受賞。晩年の1985年（昭和60）には金武観音寺の解体修復工事にも携わりたすか、1992年（平成4）に亡くなりました。享年95歳でした。



八角形の採光窓



逆梁工法・天井廻り縁のイメージ



當山記念館資料展示の様子

當山記念館は、當山久三の業績や移民に関する資料の展示に使用されています。[開館時間 9:00～16:30（入場無料）休館日 土・日・祝日・年末年始・慰霊の日]

沖繩海外移民の父「當山久三」は、1868年(明治元)に金武間切並里（現在の金武町並里区）に生まれました。當山久三は移民問題に情熱を燃やし、1899年(明治32)に沖繩県からはじめて、ハワイ契約出稼ぎ移民の送り出しに成功しました。近代化が遅れていた沖繩の生活向上に努め、多くの沖繩県人が世界に飛躍する基盤を築きました。

1909年(明治42)に沖繩県議員選挙に最高得票で当選し、将来を嘱望されていましたが病には勝てず、その翌年の1910年(明治43)に43歳という若さで他界しました。



當山久三銅像は「いざ行かむ 吾等の家は五大州」と刻まれた台座の上に立ち、遠くは太平洋ハワイの方向を指差しているといわれています。

この銅像は、金武町字金武出身で元琉球政府主席の松岡政保氏が銅像を建てるため募金運動を1929年(昭和2)にアメリカのロスアンゼルスで開始し、海外同胞をはじめ村民や県民から多額の寄付金が集まり、1931年(昭和6)に建立されました。

はじめはアメリカのニューヨーク港湾入口に立つ「自由の女神」像をイメージして那覇港に建てる計画でしたが不許可となり、やむなく銅像は金武に建てられました。

その後、太平洋戦時下の1944年(昭和19)には金属資源の不足を補うため「金属回収令」という国策のもと銅像は供出され台座だけになっていましたが、1961年(昭和36)に再建立されました。當山久三銅像再建時にも、ハワイや北米、南米の海外同胞から多額の寄付金が集まりました。



當山久三銅像が立つ金武町役場の小高い森は、それまでタカを獲る森ということで「タカティンムイ」と呼ばれていましたが、銅像が建立されてからは「雄飛の森」と呼ばれるようになりました。

国登録有形文化財

ナコオガーのイズミ（名古屋の泉）

文化財指定年月日／1994年（平成6）4月28日 町指定記念物（史跡）

金武町指定文化財



- 📍 金武町字金武10408番地
- 🚌 中川バス停より歩いて4分ほど
- 🚗 金武ICより車で12分ほど
- 🅑 専用駐車場なし
- 🗺️ MAP 中川 B-2 [21ページ]



ナコオガーのイズミ(名古屋の泉)は、中川区の集落内にあります。こんもりとした土手を掘り下げて地下水が湧き出た共同井泉(井戸)です。

この井泉は地域住民の飲料水として利用されていたほか、元旦の早朝にはじめて汲む「若水」や生まれた子供の産湯やひたいにつける水撫など「産水」としても使われていました。

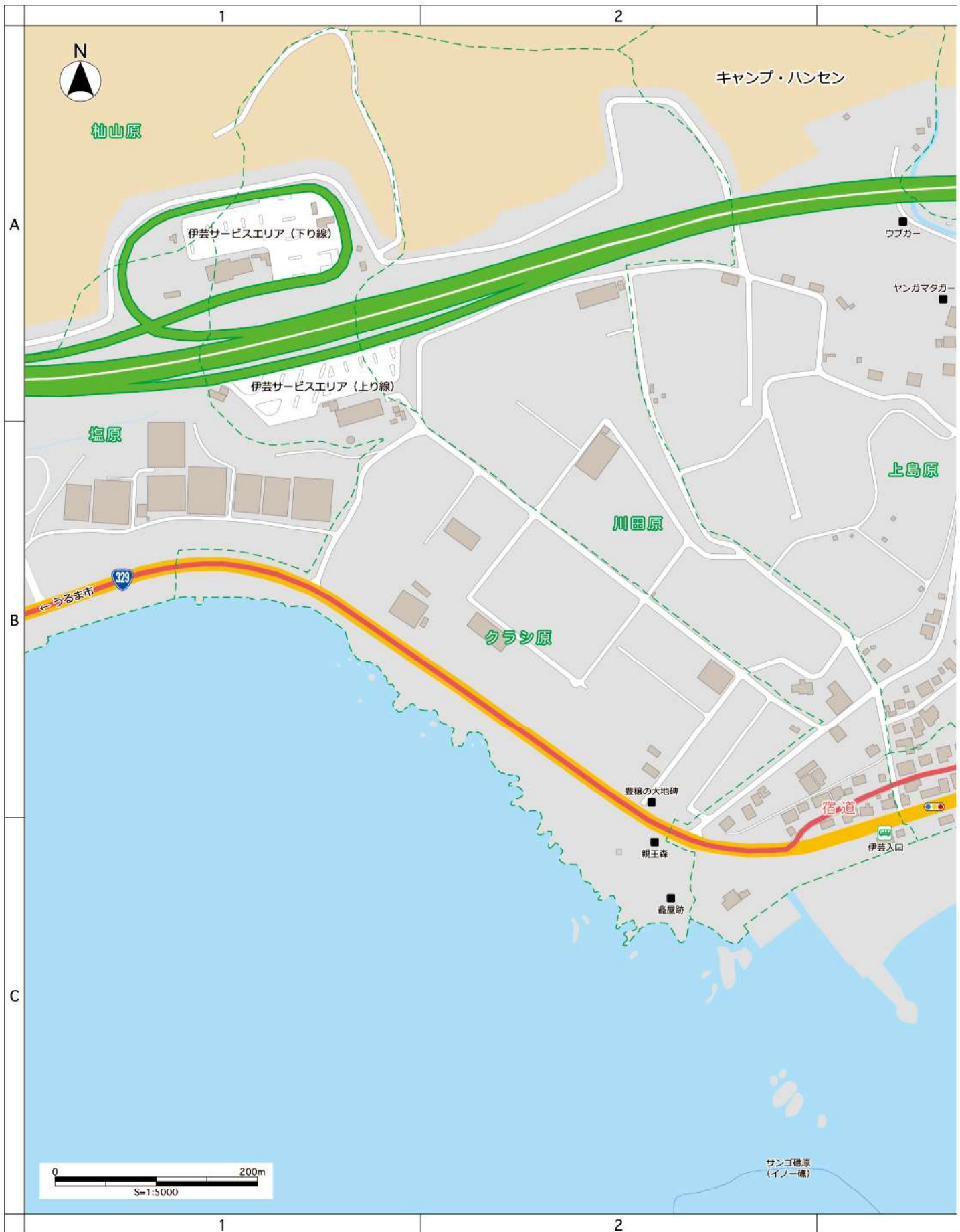
井泉から下方向には、野菜やイモの洗い場に農具や牛馬の洗い場などもありました。また、近くに住む子供たちの遊び場として人々の生活にかけがえのない水をあたえてきました。

琉球王府時代には、この井泉から近くに『国頭方東海道』とよばれる「宿道」が通っていました。この宿道は現在という「国道」にあたり、王府からの役人や旅人が手足を洗い、疲れを癒したほか、のどの渇きも潤したところでもあったと伝えられています。

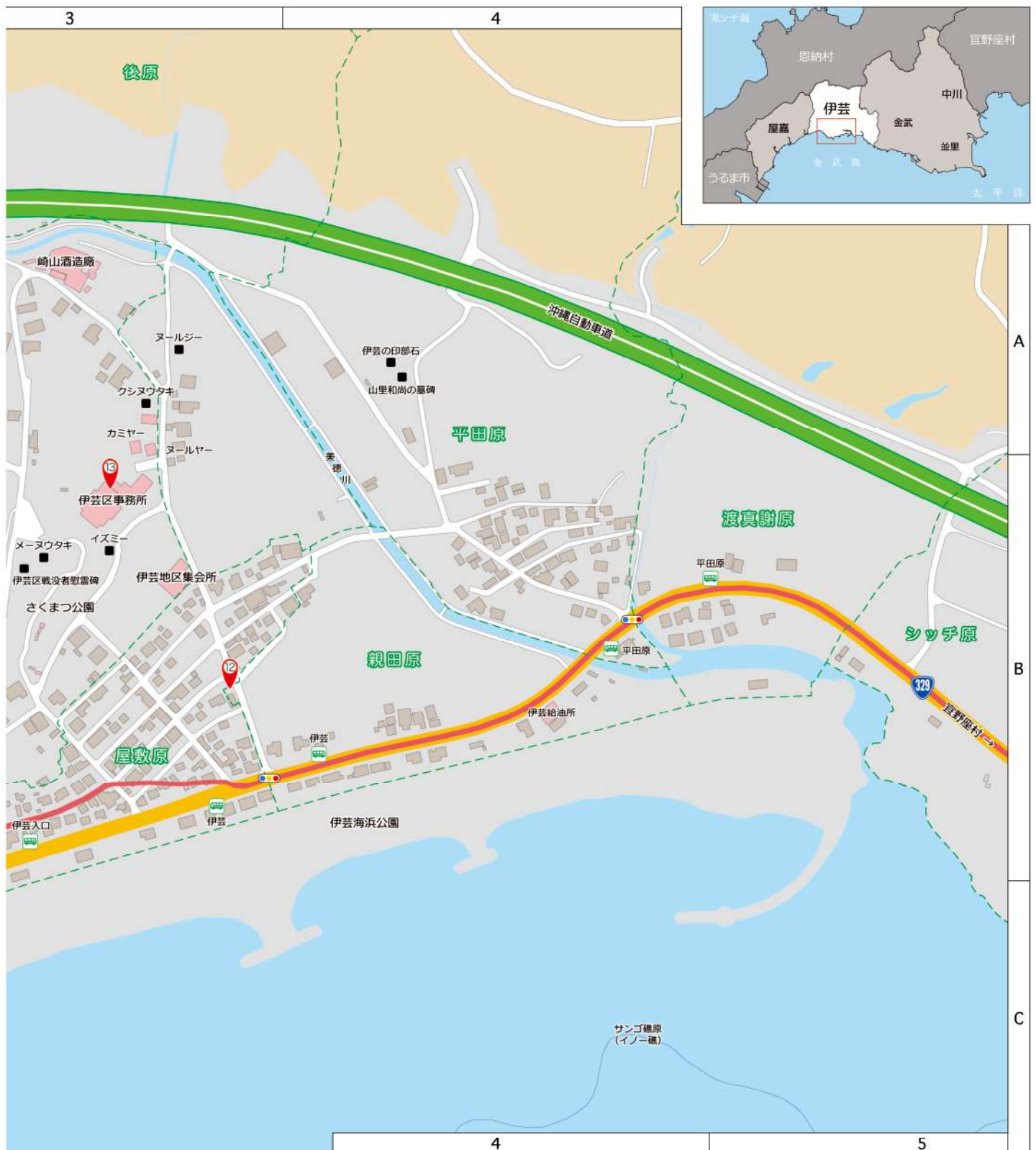
1962年(昭和37)に各家庭へと上水道が整備され、地域に安定した水が供給されたことで、ナコオガーのイズミを生活用水として利用することはなくなりました。

伊 芸 (方言: ンジ)

町指定文化財マップ



町指定文化財 県指定文化財 国登録文化財 指定文化財解除



⑫ 伊芸のがじまる

P25



伊芸のガジマルは、推定樹齢約300年といわれています。この大木がある場所では村芝居や綱引きなど年中行事がおこなわれていました。2005年(平成17)には「おきなわの名木百選」に選ばれました。

⑬ 南又島(フェーヌシマ)

P26



南又島は、顔をおおう赤毛のかつらをかぶり「棒踊り」と「素手踊り」の二部構成で演じられる民俗芸能です。古くから村芝居や行事などで演じられた南又島の踊りは現在「南又島保存会」により継承されています。

縮尺 1 : 5,000 (1cm \square = 50m)

伊芸のがじまる



- 📍 金武町字伊芸33番地
- 🚌 伊芸バス停より歩いて4分ほど
- 🚗 金武ICより車で4分ほど
- 🅑 専用駐車場なし
- 🗺️ 伊芸 B-3 [24ページ]



伊芸のがじまるは、集落のほぼ中央で生育するクワ科の熟成木で「風水ガジマル」とも呼ばれています。胸高周約4m、樹高約11m、推定樹齢は約300年とも伝えられています。がじまるの青々と茂った葉や幹から大きく発達した気根の力強さには堂々たる風格があり、集落のシンボルになっています。

かつて、がじまるがある広場には集落祭祀をおこなう神サギ(神アサギ)がありました。戦前までは五月のウマチー、六月のアブシバレー、八月の旧盆には村のノロが五穀豊穡の御願をおこない村の人々にノロが作った御神酒を分け与えていたといひます。また、1984年(昭和59)まで旧伊芸区事務所があり、村芝居や綱引きなどの集落の年中行事をおこなった重要な場所でもありました。

2005年(平成17)には、『沖縄の名木百選』に認定されました。名木として選ばれた理由に「その毅然と立つ姿や地域の多くの出来事を見守り続け、人々に語らいの場を提供している」ことなどがあげられました。

伊芸のがじまるがある公園には、神サギ(神アサギ)を模した構築物がありますが、現在は集落祭祀などはおこなわれていません。

南又島（フェーヌシマ）

文化財指定年月日／1991年（平成3）12月24日 町指定民俗文化財（無形）

金武町指定文化財



六尺棒



三尺棒



ジーノー



サールゲー



- 金武町字伊芸778-1番地
- 伊芸バス停より歩いて6分ほど
- 金武ICより車で5分ほど
- 伊芸区事務所専用駐車場
- 伊芸 B-3 [24ページ]



伊芸区事務所

フェーヌシマは、古くから伊芸の村芝居などで演じられてきた民俗芸能です。伊芸には恩納村名嘉真から伝わったともいわれていますが「すんじなりたや」からはじまる歌詞などは、那覇市安里や名護市辺野古の南又島に類似しています。

また、1906年（明治39）生まれの安富祖岩寿氏がんじゅによると「私の祖父の時代に伊芸に伝わった」と語っています。

南又島の踊りは、打掛け衣装で顔をおおう赤毛のかつらをかぶります。踊りの流れは「ハウー」のかけ声とともに長さ約1.8mの六尺棒ろくしゃくぼうを持った4人の棒踊りからはじまります。代わって長さ約0.9mの三尺棒さんしゃくぼうを持った4人による棒踊りが披露されます。次に「ハーイーヤ」の囃子はやしで意味不明な歌詞を歌いながら8人で空手踊りの「ジーノー」をはじめ、最後は2人一組になって互いの腰を抱きながら廻る「サールゲー」で退場します。

1989年（平成元）には、伊芸区の有志による「南又島芸能保存会」を結成して継承と保存に努め、毎年旧暦の8月15日におこなわれる伊芸区観月祭で披露されています。

屋嘉（方言：ヤカ）

町指定文化財マップ



14 町指定文化財 ヨリブサノ御嶽（東御嶽） P28



ヨリブサノ御嶽は、かつて前袋原一帯に存在したと伝わる「屋賀村」の神を祀る神聖な場所です。現在の集落から東の方に位置した御嶽であることから地元では「東御嶽（アガリウタキ）」と呼ばれています。

15 町指定文化財 底森御嶽（西御嶽） P29



底森御嶽は、かつて前田原一帯に存在したと伝わる「前田村」の神を祀る神聖な場所です。現在の集落から西の方に位置した御嶽であることから地元では「西御嶽（イリウタキ）」と呼ばれています。

16 町指定文化財 屋嘉のウフカー（大井戸） P30



屋嘉のウフカーは、集落発祥と大きくかかわる大井戸です。沖縄戦では日本軍捕虜収容所の設営にともない埋められた時期もありました。近年まで集落の生活用水や若水など儀礼の水にも使用されていました。

17 町指定文化財 屋嘉の芸能衣裳 P31



屋嘉の芸能衣裳は、琉球王府時代に使用されていた踊り衣裳です。沖縄戦の戦禍に巻き込まれながらも受け継がれてきました。衣裳は全部で17種類（19点）、その内の紅型衣裳2点が再現されました。



ヨリブサノ御嶽（東御嶽）

文化財指定年月日／1992年（平成4）5月7日 町指定記念物（史跡）



- 📍 金武町字屋嘉1338番地
- 🚌 伊芸小学校前バス停より歩いて10分ほど
- 🚗 金武ICより車で10分ほど
- 🅑 専用駐車場なし
- 🗺️ MAP 屋嘉 A-2 [27ページ]



ヨリブサノ御嶽は、屋嘉区フタキの集落から東の方に離れた前袋原メーフクの小高い丘の上にあります。古くからある神聖な場所として屋嘉区では「東御嶽」と呼ばれています。

御嶽は、集落の発生と深く関りがあり、1646年（順治3）に作成された『絵図郷村帳』の史料には「屋賀村」の村名がみられます。この屋賀村は1674年頃（康熙13）に「前田村」と合併する以前の村名といわれており、地元では御嶽周辺を「上又島」とよび、村を守っていた御嶽として伝承されています。

また、1713年（康熙52）に琉球王府が編集した『琉球国由来記』には「屋賀村のヨリブサノ御嶽、神名はアコウツカサノ御イベ」と記され、御嶽での祭祀は伊芸ノロがおこなっていました。

この御嶽には集落の「火の神」が祀られ、1972年（昭和47）に4代目伊芸ノロ・上江洲カナ氏の死後はノロによる神事もなくなりました。現在では、神人と屋嘉区事務所がノロに代わり、東御嶽で集落の繁栄と豊年を祈願しています。

ヨリブサノ御嶽は、2009年（平成21）に復元整備されて現在のかたちになりました。

底森御嶽（西御嶽）



- 金武町字屋嘉599-1番地
- 屋嘉バス停より歩いて7分ほど
- 金武ICより車で10分ほど
- 専用駐車場なし
- MAP 屋嘉 B-1 [27ページ]



底森御嶽は、屋嘉区ウツキの集落から北の方に位置した前田原メーダの小高い丘の中腹にあります。地元では「西御嶽」と呼び、屋嘉区にあるもう一つの御嶽(ヨリブサノ御嶽)と相対的な関係にあります。

1646年頃(順治3)に作成された『絵図郷村帳』の史料には「前田村」の村名がみられます。この前田村は1674年頃(康熙13)に「屋賀村」と合併する以前の村名といわれていますが史料には「無之」という注記があり、当時はすでに前田村が存在していなかったことがわかります。

また、1713年(康熙52)に琉球王府が編集した『琉球国由来記』には「屋賀村の底森、神名はコバツカサノ御イベ」と記されるほど由緒ある御嶽です。

この御嶽には集落の「火の神」が祀られ、古くは伊芸ノ口ニツチュと根人が集落祭祀さいしをおこなっていました。現在ではノ口はいなくなり、神人カミンチュと屋嘉区事務所が集落の繁栄と豊年を祈願しています。

底森御嶽は、2009年(平成21)に復元整備されて現在のかたちになりました。

屋嘉のウフカー（大井戸）

文化財指定年月日／1993年（平成5）4月27日 町指定民俗文化財（有形）

金武町指定文化財



- 📍 金武町字屋嘉14番地
- 🚌 屋嘉バス停より歩いて5分ほど
- 🚗 金武ICより車で10分ほど
- 🅇 屋嘉児童公園専用駐車場
- 🗺️ 屋嘉 B-2 [27ページ]



屋嘉のウフカー風景

屋嘉区のほぼ中央には、ウフカーと呼ばれる集落発祥と大きくかかわる大井戸があります。

屋嘉の伝承では、1646年頃（順治3）に屋賀村と前田村が合併して誕生したのが屋嘉村（現在の屋嘉区）といわれ、底森御嶽（西御嶽）の麓の自然湧泉を取り囲むように移り住みました。その湧泉が後のウフカーとなって集落では「ムラガー」として使用していました。

集落祭祀との関りも深い神聖な井戸でもあり、たとえば正月元旦に汲む「若水」、生まれた赤子の体を清める産湯や赤子の額に水撫をした「産水」の儀礼のほか、葬儀で棺桶に入れる前の遺体を洗い清める「湯灌」にも使われていました。

1945年（昭和20）の沖縄戦では、屋嘉集落に日本軍捕虜収容所が設営されウフカーも地中へと埋められました。1947年（昭和22）にようやく、屋嘉の人々が集落に帰ることを許されてから井戸を掘りおこして修復されました。

現在でも井戸の底から水が湧き出ていますが、人々の生活様式も変わりウフカーの水が使われることはなくなりました。

屋嘉の芸能衣裳

文化財指定年月日／1993年（平成5）4月27日 町指定民俗文化財（有形）

金武町指定文化財



屋嘉の芸能衣裳No.5 紅型模様

屋嘉の芸能衣裳は、1945年（昭和20）の沖縄戦が始まる前まで屋嘉村の村遊びで着用していた古衣裳です。

この衣裳は、1879年頃（明治12）に首里の御殿で御冠船踊の衣裳が払い下げられると聞いた村の有志が競売で入手したものとされ、村では「御冠船衣裳」として大切に用いられました。

旧暦の7月7日には村の青年たちが衣裳の虫干しをおこない、8月15日の村遊びでは「花売りの縁」「本部大主」「万歳敵討」などの組踊に着用していました。

沖縄戦では、伊藝百助氏（屋号カードー）らの親族数人で衣裳を手分けして持ち出し、渡久比那原のサクガマ防空壕や恩納岳の山中へと避難しました。米軍の上陸後は、焼け残っていた瓦家の前田家（屋号カナーメー

ダ）に移して衣裳を箱に納めていました。

戦後まもなくこれらの衣裳は、石川の避難民の手に渡り裁断されるどころでしたが、偶然にも屋嘉村の人が目撃していました。そのことを聞いた伊藝浦助氏（屋号クシイラブ小）が石川に行き衣裳を返還してもらい持ち帰ったといえます。

明治の時代に芸能衣裳を入手してから1950年頃（昭和25）までカードーの家宅で保管されていましたが、その後は村での管理を依頼したと百助氏の娘の伊藤ミネ氏は語っています。

屋嘉の芸能衣裳のなかには、琉球王府時代に士族階級だけに着用が許された冬用毛織物の一種で「把子」と称される貴重な広袖もありました。現在、衣裳は金武町立図書館で大切に保管されています。

屋嘉の芸能衣裳は、国際服飾学会および沖縄民俗学会会員で琉球服飾研究家の「植木ちか子氏」によって1991年（平成3）に予備調査と衣裳の整理をおこない、資料番号と衣裳の名称が付されました。その後、植木ちか子氏をはじめ、紅型、織物の専門家による悉皆総合調査がおこなわれたほか、トヨタ財団研究助成による総合再調査もおこなわれました。なお、織物の考証には沖縄県立芸術大学の「多和田淑子教授」のご教示を参考にしています。

背面

表面



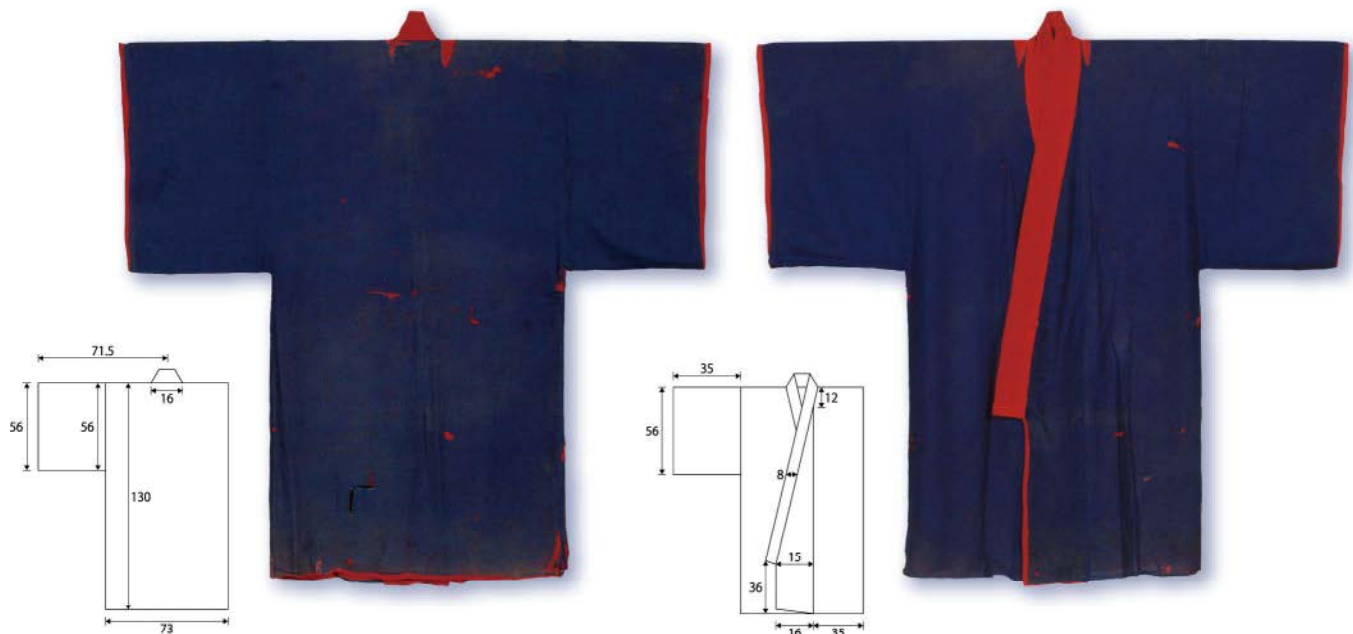
屋嘉の芸能衣裳 No.1

こきあおおもてぼ一つきな ちめんうら あわせひろそで
濃青表鞆子生成り木綿裏の袷広袖

身丈 115.0cm 袖丈 65.0cm

背面

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.2

こきあおもてこきあうらぼ一つ あわせおひろそで
濃青表濃赤裏鞆子の袷大広袖

身丈 130.0cm 袖丈 71.5cm

本書に掲載する屋嘉の芸能衣裳の名称は、1991年(平成3)に植木ちか子氏等が予備調査で付された資料番号と衣裳の名称を参考にしています。屋嘉の芸能衣裳 No.1 / No.2 は縮尺 18分の1 に編集し、図の寸法単位はセンチメートルで掲載しています。

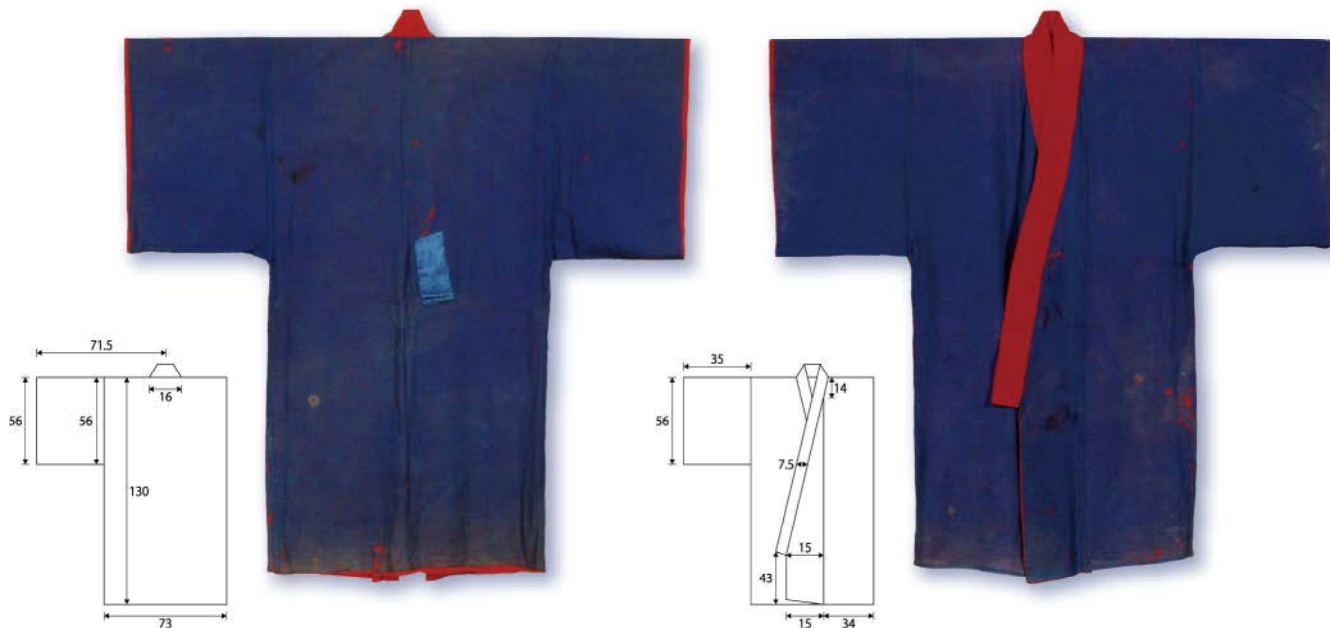
屋嘉の芸能衣裳

文化財指定年月日／1993年（平成5）4月27日 町指定民俗文化財（有形）

金武町指定文化財

背面

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.3-1

こきあおもてこきあからぼーつ あわせおおひろそで
濃青表濃赤裏鞆子の袷大広袖

身丈 130.0cm 桁丈 71.5cm

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.3-2

こきあおもてこきあからぼーつ あわせおおひろそで
濃青表濃赤裏鞆子の袷大広袖

身丈 130.0cm 桁丈 71.5cm

「琉球人舞楽絵巻」

屋嘉の芸能衣裳によく似た衣裳が描写された絵巻

屋嘉の芸能衣裳 No.3-1 / No.3-2 は、縮尺 18 分の 1 に編集し、図の寸法単位はセンチメートルで掲載しています。
沖縄県立博物館・美術館所蔵「琉球人舞楽絵巻」

背面

表面



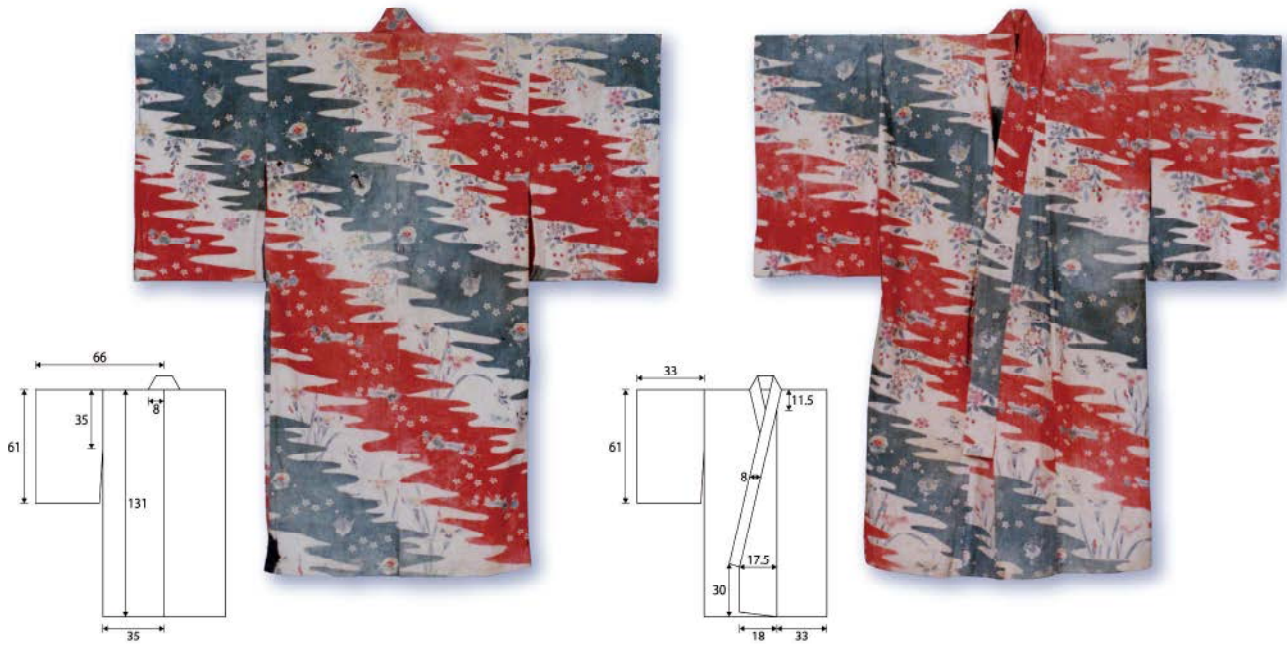
屋嘉の芸能衣裳 No.4

しろじかすみ あさ は しだれざくらたんざくうめたけがきたんぼほぎくすいせんちようもようもんびんがたひとふりそで
 白地震(麻の葉)枝垂桜短冊梅竹垣蒲公英菊水仙蝶模様木綿紅型単振袖

身丈 133.0cm 桁丈 69.0cm

背面

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.5

しろじ そめじ いなづまな わ しだれざくらしょうぶちどりきさくらいけがきあきがおつちもようきんすりほくい もんびんがたひとふりそで
 白地と染地の稲妻斜め分けに枝垂桜菖蒲千鳥笹桜生垣朝顔蔦模様金摺箔入り木綿紅型単振袖

身丈 130.0cm 桁丈 66cm

屋嘉の芸能衣裳 No.4 / No.5 は、縮尺 18 分の 1 に編集し、図の寸法単位はセンチメートルで掲載しています。

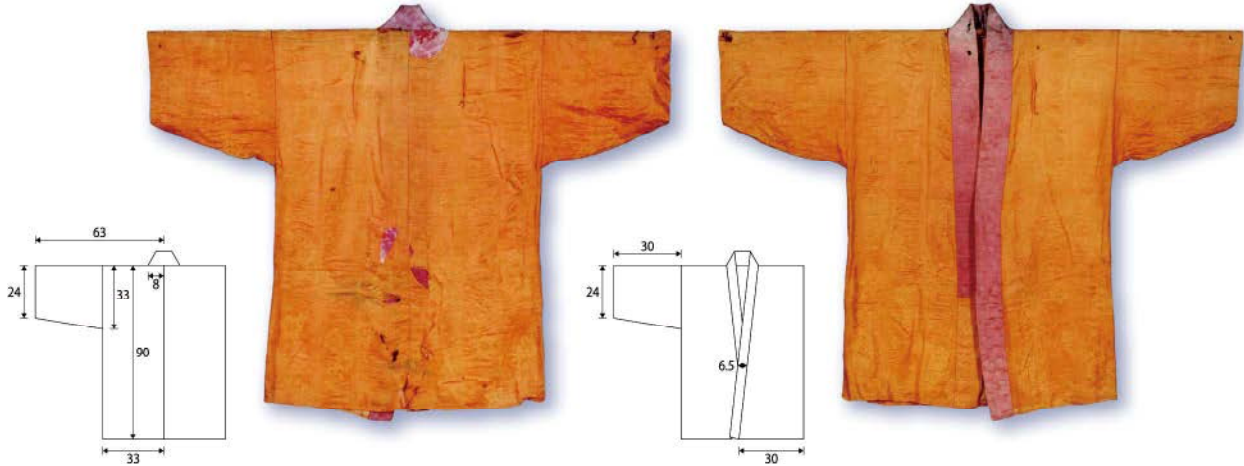
屋嘉の芸能衣裳

文化財指定年月日／1993年（平成5）4月27日 町指定民俗文化財（有形）

金武町指定文化財

背面

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.6

かぼいろじはなつるもんきぬしゆす ひとえどかん
樺色地花蔓文絹縹子の単胴衣

身丈 90.0cm 桁丈 63.0cm

背面

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.7

きんちやいろあさじ おおいろがらい ふちぎで ひとえぼおり
金茶色麻地に青色柄入り縁袖の単羽織

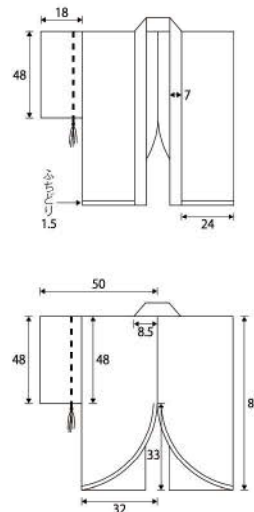
身丈 72.0cm 桁丈 36.5cm

屋嘉の芸能衣裳 No.6は縮尺 18分の1、No.7は縮尺 14分の1に編集し、図の寸法単位はセンチメートルで掲載しています。

背面



表面



屋嘉の芸能衣裳 No.8

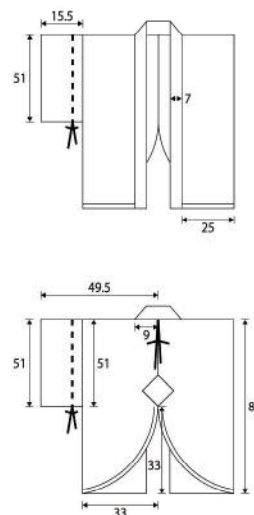
しろもめんじ あか がら まり ふちまで ひとまじんぼおり
白木綿地に赤プリント柄の衿と縁袖の単陣羽織

身丈 81.0cm 衿丈 50.0cm

背面



表面



屋嘉の芸能衣裳 No.9

おうぢいろもめんじ もめんびんがたふちまで ひとまじんぼおり
黄土色木綿地に木綿紅型縁袖の単陣羽織

身丈 84.0cm 衿丈 49.5cm

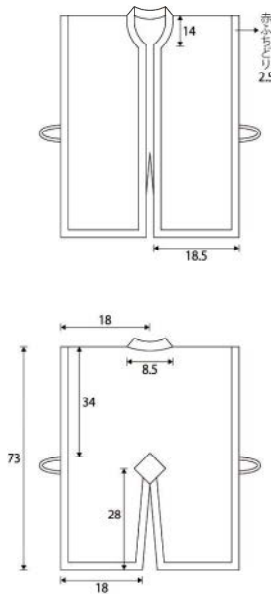
屋嘉の芸能衣裳

文化財指定年月日／1993年（平成5）4月27日 町指定民俗文化財（有形）

金武町指定文化財

背面

表面



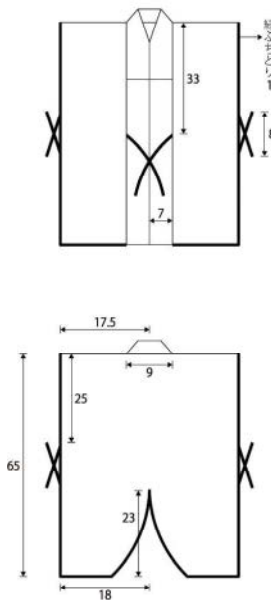
屋嘉の芸能衣裳 No.10

もめんごんじしろがすり よこうきはなおり あかふちどり あわせひきばおり
木綿紺地白緋の緯浮花織に赤縁取の袷引羽織

身丈 73.0cm 桁丈 18.0cm

背面

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.11

ちもいろか こ みどりふちどり ひもえひきばおり
桃色鹿の子モスリンに緑縁取の単引羽織

身丈 65.0cm 桁丈 17.5cm

屋嘉の芸能衣裳 No.10 / No.11 は、縮尺 10 分の 1 に編集し、図の寸法単位はセンチメートルで掲載しています。



屋嘉の芸能衣裳 No.12

白地に五色鱗模様木綿紅型の単馬乗袴

紐下 84.0cm 後ろ幅 45.0cm



屋嘉の芸能衣裳 No.13

紺と赤の経縞芭蕉布の平袴

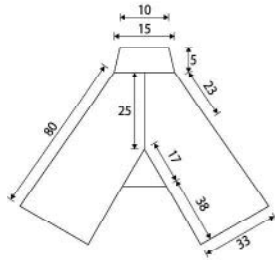
紐下 73.0cm 後ろ幅 33.5cm

屋嘉の芸能衣裳

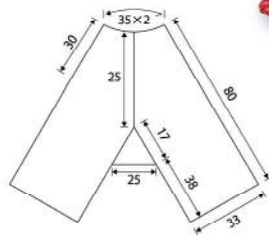
文化財指定年月日／1993年（平成5）4月27日 町指定民俗文化財（有形）

金武町指定文化財

背面



表面



屋嘉の芸能衣裳 No.14-1／No.14-2

白地に赤矢飛白プリント木綿の胴囲布無袴／腰板付袴

(左)No.14-1 紐下 80.0cm 後ろ幅 33.0cm／(右)No.14-2 紐下 80.0cm 後ろ幅 33.0cm



屋嘉の芸能衣裳 No.15-1／No.15-2

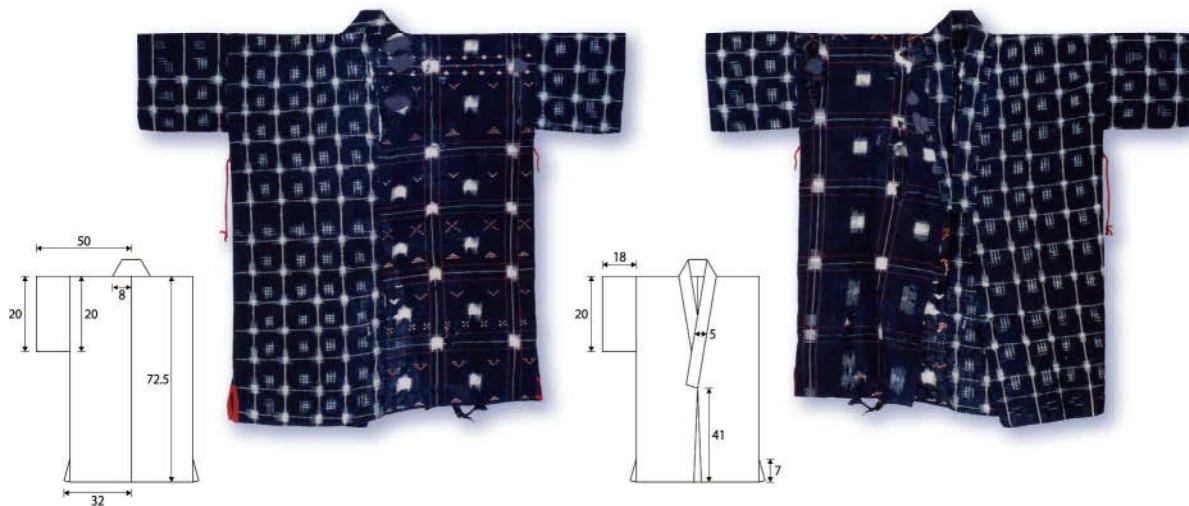
屋嘉村銘の木綿織

(左)No.15-1 長さ 179.0cm 幅 117.0cm／(右)No.15-2 長さ 184.0cm 幅 112.0cm

屋嘉の芸能衣裳 No.14-1／No.14-2は、縮尺 18分の1、No.15-1／No.15-2は縮尺 25分の1に編集し、図の寸法単位はセンチメートルで掲載しています。

背面

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.16

もめんこんじしろがすり かすり ていぼな かたみがりひとえどちん
木綿紺地白緋と緋に手花の片身替単胴衣

身丈 72.5cm 桁丈 50.0cm

表面



屋嘉の芸能衣裳 No.17

こんぼしういと もめんこんじしろかすりいとまぜおり もめんびんがたえり ひとえどちん
紺芭蕉糸と木綿紺地白緋糸交織に木綿紅型衿の単胴衣

身丈 78.0cm 桁丈 40.0cm

金武町の指定文化財

町指定文化財は、いずれも金武町の歴史に培われてきた貴重な文化財であり、町民の生活や風習との関わりをもち、地域（部落）の推移を知る上で欠くことのできない文化遺産です。

町民の郷土に対する認識を高め、文化の向上と将来への継承に資することを目的に、その保存と活用を図っています。

金武町指定文化財一覧

番号	名称	種別	所在地	指定日
1	金武観音寺	有形文化財（建造物）	字金武222番地	1984年(昭和59) 6月1日
2	伊芸のがじまる	天然記念物	字伊芸33番地	1991年(平成3) 7月16日
3	ヘーシンバ 拝神場のアコウ	天然記念物	字金武436-1番地	1991年(平成3) 12月25日 ※指定文化財解除日 2000年(平成12) 5月24日
4	観音寺のフクギ	天然記念物	字金武222番地	1991年(平成3)12月24日
5	慶武田川（キンタガー）	記念物（史跡）	字金武919番地	1991年(平成3)12月24日
6	茶川（サーガ）	記念物（史跡）	字金武12041-2番地	1991年(平成3)12月24日
7	南又島（フェーヌシマ）	民俗文化財（無形）	字伊芸778-1番地	1991年(平成3)12月24日
8	ウッカガー（金武大川）	記念物（史跡）	字金武640番地	1992年(平成4) 5月7日
9	ヨリブサノ御嶽（東御嶽）	記念物（史跡）	字屋嘉1338番地	1992年(平成4) 5月7日
10	ウタキ イリ 底森御嶽（西御嶽）	記念物（史跡）	字屋嘉599-1番地	1992年(平成4) 5月7日
11	まがたま かんざし こもんじょ 勾玉・簪・古文書 （金武ノ口神具）	民俗文化財（有形）	字金武224番地	1992年(平成4) 5月7日
12	屋嘉のウフカー（大井戸）	民俗文化財（有形）	字屋嘉14番地	1993年(平成5) 4月27日
13	屋嘉の芸能衣裳	民俗文化財（有形）	字屋嘉360-1番地	1993年(平成5) 4月27日
14	トゥムスズ御嶽	記念物（史跡）	字金武126番地	1994年(平成6) 4月28日
15	ナコオガーのイズミ （名古川の泉）	記念物（史跡）	字金武10408番地	1994年(平成6) 4月28日
16	旧億首橋	記念物（史跡）	字金武10406番地付近	2021年(令和3) 1月1日
17	旧金武村の忠魂碑	記念物（史跡）	字金武4番地	2021年(令和3) 1月1日

沖縄県指定文化財一覧

番号	名称	種別	所在地	指定日
1	ぼんしょう 梵鐘（旧天界禅寺鐘）	有形文化財（工芸品）	字金武222番地	1985年(昭和60) 6月18日

国登録文化財一覧

番号	名称	種別	所在地	指定日
1	當山記念館	有形文化財（建造物）	字金武4番地	2021年(令和3) 2月26日

附編 1 金武町の歴史

先史時代

金武町では、これまで30余りの埋蔵文化財が確認されています。

本町で発見された最古の資料は億首川河口付近の西先謝原遺物散布地で採集された縄文時代前期(沖縄貝塚時代前期:約5,000年前)の条痕文系土器があります。また、億首川下流周辺には、飛留喜田原A遺跡や頭呂地原遺物散布地など、縄文時代後・晩期(沖縄貝塚時代前・中期)、弥生～平安並行時代(沖縄貝塚時代後期)、グスク時代初期など各時期所産の遺物が確認されています。

2021年(令和3)には、並里区で町道整備工事の際に縄文時代後期から晩期(沖縄貝塚時代前期:約3,500年前～中期:約2,500年前)の「伊波式土器」「荻堂式土器」「大山式土器」「室川式土器」と呼ばれる土器類が出土しました。また、石斧や磨製石器といった石器類のほか、食料として食べたとみられる動物の骨、魚の骨、貝殻といった遺物(植物残渣)も多く出土

しました。この遺跡は発見された土地の名称から『美里原遺跡』と名付けられました。

グスク時代・古琉球

10～11世紀頃の沖縄貝塚時代後期(終末期)の沖縄島の人々は、漁撈採集を中心とした食糧生産獲得経済から農耕の本格的開始による食糧生産経済に移行しました。

本町でも、資源供給地であるサンゴ礁環境に近い海岸線付近から離れて、未開拓地の内陸部に生活営為の拠点を移したと考えられています。

金武区にある金武鍾乳洞遺跡からは、グスク時代初期の土器や中国産陶磁器などが採集されました。また、町内にあるほかの遺跡や遺物散布地でも、中国産輸入陶磁器や奄美群島徳之島で作られていたカムイヤキ、滑石製石鍋といったグスク時代でも比較的古手の船載容器類(船に積んで運ばれた物)が採取されました。

13～14世紀頃になると沖縄島各地に有力支配者が登場し大型城塞のグスクが築かれるようになりました。本町でも内陸部の開発や集落、



01. 町域内出土の先史時代遺物(土器・石器等) 02. 金武グスク近景(金武区事務所裏手の毛又上と呼ばれる丘陵)
03. 美里原遺跡埋蔵文化財予備調査の状況(試掘調査) 04. 美里原遺跡出土の遺物(土器・石器・獣骨・魚骨・貝類等)

『先史時代』とは、考古学における時代区分の一つ。文献記録が存在する以前の時代を指し、日本では主に「旧石器時代」から「弥生時代」を指します。『グスク時代』とは、沖縄本島を中心に奄美から与那国までの琉球文化圏。按司(あじ)などが出現し、各地で様々な城(グスク)が築かれた時代を指します。『古琉球』とは、琉球の古代をひろくとらえようとする沖縄文学研究を中心とした一つの時代区分の呼称です。

附編 1 金武町の歴史

支配者の出現があったものと思われます。この時期に金武グスクでの按司の居住は未確認ではありますが『おもろさうし』に「きんのよのぬし（金武の世の主）」の名が登場します。

「金武」の地名がいつ発生したのかさだかではないが、現在確認できる文献では“玉陵碑文”（1501年）に尚真王第六男の尚享仁が「きんのあんし」と記され、この時点で金武間切が創設されていたと考えられています。また、恩納ノ口辞令書（1584年）には「きんまきり（金武間切）」の記載もあり、当時の金武間切は現在の恩納村名嘉真以北から名護市久志・辺野古までを含む広範囲の領域でした。（図1. 上段）

近世琉球

1609年に島津氏（薩摩藩）の琉球侵攻後には『地頭制』と呼ばれる地方行政制度が創設されました。

間切全体を所領する立場の「両総地頭」と、間切内村を領する「脇地頭」は首里や那覇に居住し、王府が各間切と島の基本的な統治を担う

一方で、間切行政は間切と村の役人によっておこなわれました。また、島津侵攻後に「間切・シマ制度」は「間切・村制度」に改編されました。行政区分としての「シマ」は「村」（現在の字に相当）に変化していきました。

1646年に成立した『絵図郷村帳』に記された金武間切には、金武村・いげ村・屋賀村・かなな村・そうけ村・ぎのざ村・こちや村・おんな村・せらかち村・あふそ村・中間村・くし村・へのき村で構成されています。また、現在伝わる村名以外に、つぶた村・平田村・前田村・はま村の村名も登場します。これらの村は現在の並里区・伊芸区・屋嘉区にかつて存在していた村であるが“当時無之”と注記があり、文献成立時にはすでに廃村となっていたか、又は隣接する村と合併していたものと考えられています。

17世紀半頃になると間切分割とよばれる行政区画が再編され、1673年には恩納間切と久志間切が新設されました。これにともない金武間切の恩納・瀬良垣・安富祖・名嘉真の四村が

附編

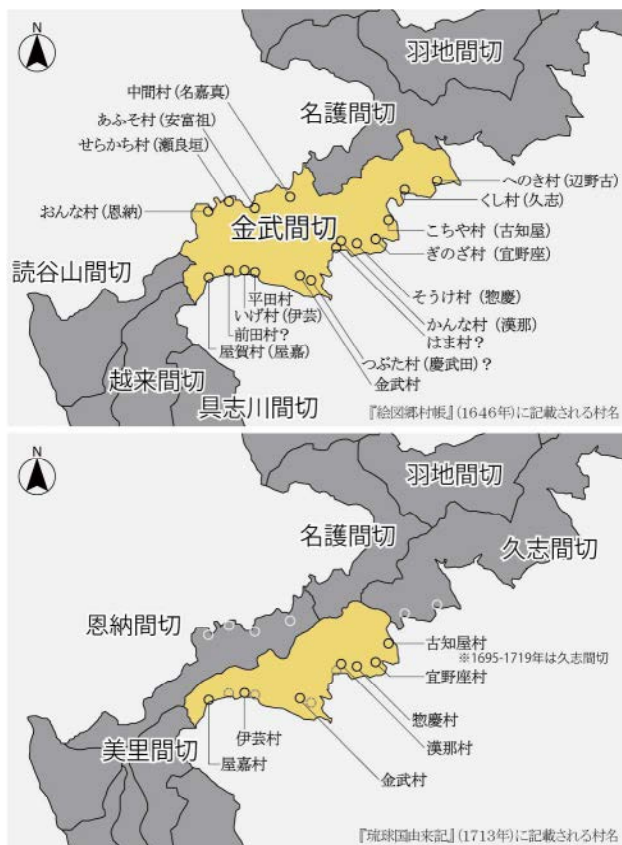


図1. 金武間切域の範囲変遷

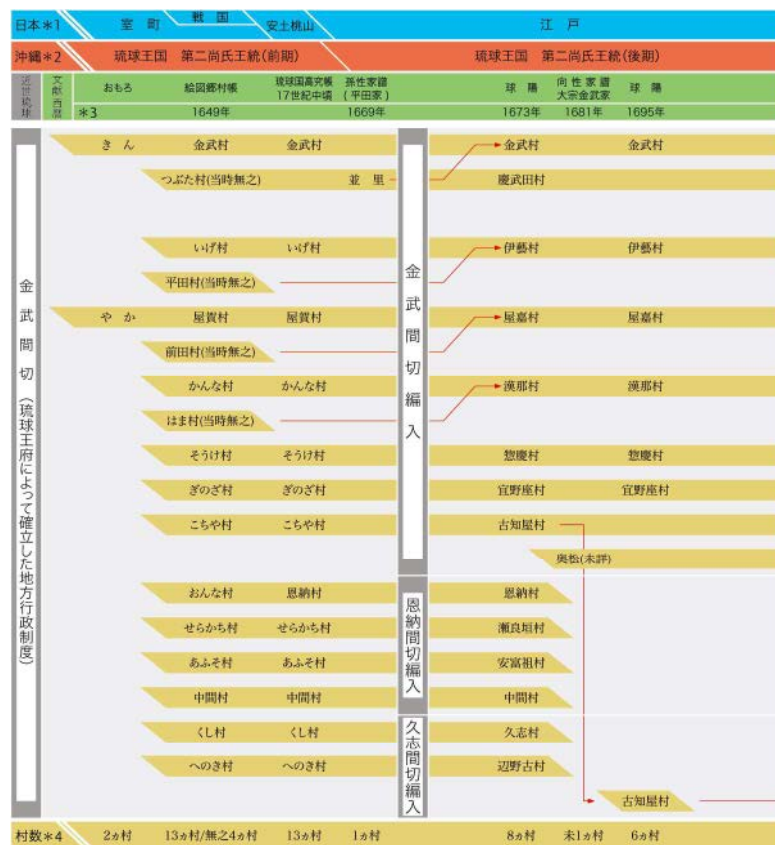


図2. 金武における部落の変遷

附編 1 金武町の歴史

沖縄戦～現代

1945年(昭和20)の沖縄戦では米軍の進行により、金武村にも戦争の影響がみえはじめてきました。

金武村を占領した米軍は、金武・並里集落北側の広大な農地に「金武飛行場」を建設し、ほとんどの家屋が破壊され、屋嘉には沖縄最大規模の日本軍捕虜を収容した屋嘉捕虜収容所やかほりよしゅうようじょが置かれました。本島北部の東海岸地域には民間人収容所が集中的に置かれ、人口が急増した旧金武村東部の四字(漢那・宜野座・惣慶・松田)は、終戦の翌年、1946年(昭和21)に宜野座村として分村されました。また、戦前は並里区に帰属していた源原集落もこの年に中川区に編入されました。

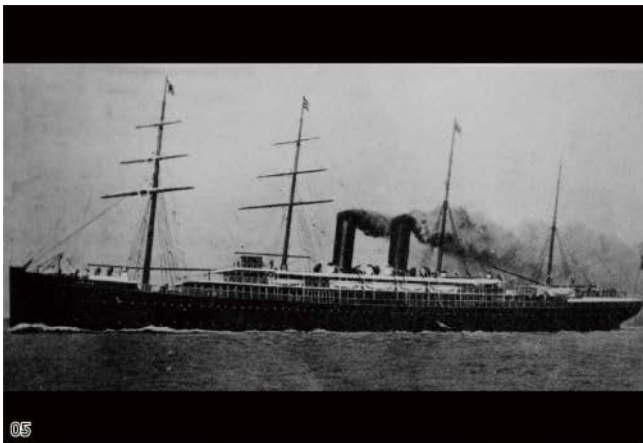
1947年(昭和22)、米軍は旧金武飛行場周辺で射撃演習を開始し、1957年(昭和32)には飛行場跡地に兵舎(キャンプ・ハンセン)が建設され、海兵隊の移駐が開始されました。ギンバル訓練場、ブルービーチ訓練場、レッドビー

チ訓練場もこの時期に建設されました。

これら米軍基地の総面積は約2,109ha(返還されたギンバル訓練場は含まない)あり、町面積の55.7%を占め(令和2年3月末現在)、町土利用を大きく制約しています。基地建設には多くの村民が軍作業(基地建設工事)に従事するようになり他地域からの人口流入も進みました。

純農村地域であった金武村の産業構造は一変し、1960年(昭和35)前半になると第一ゲート前を中心に歓楽街かんらくがいが広がり、米兵を相手に営業を認められた「Aサイン」許可証を掲げた飲食店が建ち並び「新開地」が形成され賑わいました。

その後、基地関連産業の活況や産業基盤の整備が進み、1980年(昭和55)に町制が施工されたことで金武村から「金武町」になりました。また、現在も金武町随一の繁華街はんかがいとして栄える新開地は異国の雰囲気を出し独特な世界が広がり、県内外から多くの人たちが訪れる観光スポットとしても賑わいをみせています。



05. 第一回海外移民三十人を乗せた「チャイナ号」1899年(明治32)
07. ペルーへ移民した伊芸好子さんのお店

06. ハワイ移民のサトウキビ耕地における労働の様子(比嘉太郎氏資料)
08. 1931年(昭和6) 富山久三像建立落成式に参列した海外同胞(仲村貞様寄贈)



09



10



11



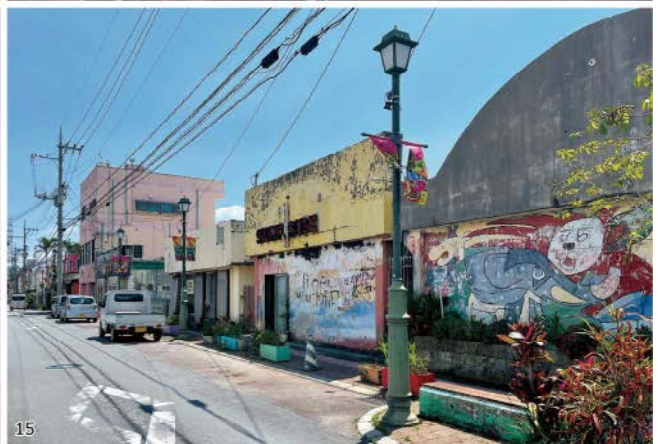
13



12



14



15

09. 1945年(昭和20)3月 空襲で破壊された校舎(金武小学校)

11. 1945年(沖縄戦末期) 日本軍捕虜を収容した「屋嘉捕虜収容所」

12. 戦後間もない頃に撮影された富山久三像の台座(仲村真様奇贈)

14. 1964年頃 飲食店が立ち並び賑わった「新開地」の風景(伊芸光吉氏提供)

10. 1945年(昭和20)4月 金武村を侵攻した米軍は「金武飛行場」を建設

13. 1961年(昭和36) 富山久三像再建立した時の除幕式の様子

15. 2022年(令和4) 金武町随一の繁華街として栄える「新開地」

附編 2 再現された屋嘉の芸能衣裳

屋嘉の芸能衣裳 No.4 は、枝垂桜の柄と水色の霞模様が特徴な衣裳です。

科学調査の結果、染料として臙脂が使われていることが判明しました。

再現製作では、生地全体を臙脂で鮮やかな桃色に染め、かつての色彩をよみがえらせました。

紅型の技法に関しては、ステンシルを用いて花の図柄をところどころちりばめたり、筆で線を直接書き込むなど、自由で大胆な技法がとり入れられています。



屋嘉の芸能衣裳 No.4 (再現)

白地震(麻の葉)枝垂桜短冊梅竹垣蒲公英菊水仙蝶模様木綿紅型単振袖

身丈 150.5cm 袖丈 74.0cm



屋嘉の芸能衣裳 No.5 (再現)

白地と染地の稲妻斜め分けに枝垂桜菖蒲千鳥笹桜生垣朝顔蔦模様金摺箔入り木綿紅型単振袖

身丈 151.5cm 袖丈 63.0cm

屋嘉の芸能衣裳 No.5 は、赤と青に染め分けられた大胆な霞模様に、枝垂桜、菖蒲、鳥などの柄が特徴です。

これまで典型的な紅型には「金箔」はないとされていましたが、科学分析をおこなった結果、染織後に施された装飾の素材が金箔であることが確認されたました。

図柄などの構成から『伝統的な紅型』のイメージをくつがえす貴重な資料になりました。また、原資料の素材は木綿ですが、舞台衣裳として着用することも考慮し、再現衣裳は絹で製作されました。

2020年(令和2年度)金武町ふるさと創生事業の助成金交付を受けて、金武町指定文化財「屋嘉の芸能衣裳」の調査および製作工程再現から携わってきた沖縄県立芸術大学(渡名喜はるみ教授・工芸専修染研究室)、前田びんがた工房(前田直美)の協力を得て、屋嘉の芸能衣裳17点のうち2点を再現することができました。再現された芸能衣裳 No.4 / No.5 は、縮尺18分の1に編集して掲載しています。

引用参考文献一覧

【沖縄県刊行物】

- ・ 沖縄県教育庁文化財課編『沖縄県歴史の道調査報告書VI 一 国頭方東海道・他一』沖縄県教育委員会 1989 年
- ・ 沖縄県教育庁文化財課編『沖縄県の信仰に関する建造物 近世社寺建築緊急調査報告書』沖縄県教育委員会 1991 年

【金武町関係】

- ・ 金武町誌編纂委員会編『金武町誌』金武町役場 1983 年
- ・ 金武区誌編集委員会編『金武区誌 戦前編上・下』金武区事務所 1994 年
- ・ 並里区誌編纂委員会編『並里区誌 戦前編』並里区事務所 1998 年
- ・ 並里区事務所編『並里区歴史写真集 一世紀を越え未来へ一』並里区事務所 2001 年
- ・ 屋嘉区誌編纂委員会編『屋嘉区誌（戦前編）』屋嘉区事務所 2005 年
- ・ 金武町伊芸区編『伊芸誌』金武町伊芸区事務所 2013 年
- ・ 金武町教育委員会編『金武町乃指定文化財』金武町教育委員会 1994 年
- ・ 金武町教育委員会編『金武町文化財調査報告書第 2 集 金武町の井泉一水をめぐる人々のくらし一』金武町教育委員会 2003 年
- ・ 金武町教育委員会編『金武町の歴史と文化第 4 集 町内埋蔵文化財予備調査報告書一億首川周辺（平成 18～20 年度）一』金武町教育委員会 2010 年
- ・ 金武町教育委員会編『金武町の歴史と文化第 6 集 スージン小探訪』金武町教育委員会 2012 年
- ・ 総務課広報係編『広報金武 No. 443』金武町役場 2006 年

【その他参考資料】

- ・ 天野鉄夫著『琉球列島植物方言集』新星図書出版 1979 年
- ・ 沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983 年
- ・ 『沖縄文化財百科 第 1 巻建造物・美術工芸』那覇出版社 1988 年
- ・ 原田禹雄著『徐葆光 中山伝言録 新訳注版』榕樹書林 1999 年
- ・ 大川智史 林将之著『琉球の樹木 奄美・沖縄～八重山の亜熱帯植物図鑑』文一総合出版 2016 年
- ・ 勝連盛豊著『検証 沖縄の棒踊り』有限会社沖縄文化社 2019 年
- ・ 座間味栄議著『沖縄「歴史の道」を行く』むぎ社 2001 年

金武町の歴史と文化 第10集

金武町の指定文化財

発行年 2022（令和4）年3月30日

編集・発行 金武町教育委員会

〒904-1201 沖縄県国頭郡金武町字金武 7758 番地

電話 098-968-8996 <社会教育課>

印刷 (株) 東洋企画印刷

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町 4-21-5

電話 098-995-4444



山崎記念館

Kin-town

志魂碑